
勇者『ああああ』

上川 勲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者『ああああ』

【Nコード】

N5700G

【作者名】

上川 勲

【あらすじ】

アカシヤ戦記と呼ばれるオンラインゲームで、勇者の冒険は始まる。プレイヤーに振り回されるアバターの苦悩を描いた冒険ファンタジー。 9月27日、第17話更新しました。 次回更新は未定です。

第1話 さあ、ゲームの時間だ

アカシャ戦記。

そこそこ人気のあるオンラインゲームで、過疎になったことは今のところゼロだ。

ゲームはまず、魔王側か勇者側かを決定する。それから自分好みのアバターを作成し、魔王側を選んだものは勇者側を、勇者側は魔王側と戦い、互いに競り合うのだ。

そして、負けると相手側に下るか、レベルを数段下げてコンティニューするかを選ぶ羽目になる。レベルを落としたくない者は身内からバッシングを受けようと相手側に倉を移し替えるし、義理堅い者はレベルを落としてもコンティニューを選ぶ。

ただ、人によっては相手に鞍替えした後、かつての味方たちにわざと倒されることで、レベルを維持したままコンティニューするような輩もいたため、後に『一度相手に寝返った者は半年間、相手側に下ることができずにレベル数段下げたのコンティニューのみとなる』という制約が設けられた。なお、モンスターと戦って負けた場合は、前述したようなペナルティはなく、代わりに所持金が半分になる。

勇者側も魔王側も、基本的にフィールド上にいるモンスターを倒すことでレベル上げをしていくのだが、プレイヤー同士で戦うこともできるものの、身内の者……つまり、勇者側は勇者側のプレイヤーを、魔王側は魔王側のプレイヤーと対戦できない。ただ、身内同士の戦いは闘技場で行うことができ、それは専ら互いに練磨するために用いられている。

……と、アカシャ戦記についての記述はこのくらいにして、細かいことは必要になったときに説明することにしよう。

……え？　僕がいつたい何者か知りたいって？
ふふふ……、いいよ。教えてあげるよ。

僕は……勇者だ！

……と、かつこよく公言してみたけど、実のところ、僕はまだプレイヤーが決まっていけないアバターだ。

言ってしまうば、生まれる前の赤ん坊って感じかな。おかげで視界が黒一色、自分の身体さえないから意識のみが空間を浮遊している感覚が、僕を支配している。名前ももちろんない。

ああ……誰か……。僕を使ってくれないかなあ……。勇者となつて必死にがんばってみせますから……。って言っても、操作するのはプレイヤーの人なんだけどね。僕はプレイヤーの代わりに仮想世界を歩き回る人形のようなものだ。

ああでも、それでもいい。早く冒険がしたいんだ、僕は。

これが勇者の血つてやつかな？　魔王軍を懲らしめて、善の道へと導く。そして人々のために貢献させるんだ！

誰か……。そんな志を持っているプレイヤーの方！

早く来て！

僕をセレクトして！

そして共に魔王軍をこてんぱんのけちゅんけちゅんにしてやろう！

——と、そのとき、視界が黒一色から一転、白一色となった。

どうやら僕を選んでくれた人がいたようだ。

おおッ！　同志よ！　よく僕を選んだくれた！　感謝感激雨あら

れとはこのことだね！

さあ、まずは身体のパーツを決めてくれ。できるだけ勇者っぽい仕上げてよね。……って、僕が言ったところで画面の向こう側にいるプレイヤーさんには聞こえないわけだけど。

プレイヤーさんは、徐々に僕の身体を構築していつてくれている。赤い帽子、団子鼻に立派に蓄えられた髭。小柄でかつ肥満気味の体形。赤いシャツに青いつなぎを着せて、両手に白の軍手を装着させる。

……あれ？ なんだろう。ものすごくどこかで見たような姿……。僕のような新参者のゲームキャラクターにはもったいなさ過ぎの格好をしているように思えるのは気のせい？

プレイヤーさんは満足したのか、キャラメイクはこれで終了になった。僕的にはもう少し別の格好にしてほしかったけど、文句なんて言えるわけがない。

次は名前をつける工程だ。さあ、勇者っぽい名前を存分に付けてくれ！

プレイヤーさんは悩んでいるようで、名前欄に一文字も打たないそうそう。名前は慎重に選ばないとね。間違つても『TOILE T P A P E R』なんてネーミングは止めてよね。僕はあんなペラペラした紙みたいに魔王軍に流されたくないから。

後、名前を決めるのが面倒くさいからって『勇者』なんて名前にもしないでほしいなあ。……いや、まあ確かに勇者なんだけど……その……ストリートすぎる名前もどうかと思うからさ。

……それにしても、いくらなんでも名前を決定するの遅すぎじゃないかな？

確かにある程度は慎重に決めなきゃだと思っけどさ。そろそろ決めてもいいんじゃない？

僕も早く冒険したいし。同志たちと対面したいのに……。

瞬間、名前欄にもものすごい勢いで文字がタイプされ、次へのボタンがクリックされた。あまりの早さに、僕は自分の名前が何になっ

たのか確認できなかった。

……ははあ、なるほどね。僕に見られるのが嫌で、プレイヤーさんは光速タイピングスキルを用いたんだな。可愛いところあるじゃない、僕のプレイヤーさんは。

次に、各パラメーターの数値の割り付けの画面になった。

パラメーターは、HP、MP、攻撃、防御、魔法攻撃、魔法防御があつて、それらに最初に与えられた300ポイントを振っていくことで、自分のキャラクターの強さを決めることができる。さあ、プレイヤーさん。好きなように数値を振ってくださいな。

そんな僕の思いがプレイヤーさんに届いたのか、僕の各パラメーターが決定されていく。

HP	5
MP	0
攻撃	295
防御	0
魔法攻撃	0
魔法防御	0

………え？ なに？ この神風アタック専門のパラメーターは………ちよつと、プレイヤーさん。なに『次へ』のクリックボタンを押してるの？ それを押すと確認画面が現れてしま………って、ぎゃああああああ！

僕はその確認画面を見て喫驚の声を上げた。

自分の容姿、パラメーターは前述したとおり。

それだけでも十分すぎるはずなのだが、ウィンドウに表示されている名前が酷かった。

視界いっぱい広がる、これから自分の足で歩むことになるア
カシャ戦記の世界観……。

そしてそこですでに冒険を繰り広げている冒険者たちの姿……。

かくして僕、勇者『あああ』の冒険が始まった。

第1話 さあ、ゲームの時間だ（後書き）

どうも、なかたくです。

まず始めに、「魔術師シリーズ」が突然閲覧不可になったことなんですが……。

実は私的な用件のため、勝手ながら一時的に消させていただきしました。半年以内に復活すると思いますので、それまでは代わりとして、こちらの物語を連載させることにしました。

勝手ながら本当にすいません。

第2話 さあ、探索しよう

やつほー。みんな、ごきげんよう。

僕は全然ご機嫌じゃないけどね。アハハハハ……。

僕は現在、勇者側になった人が最初に訪れる村——『ビギナー・ヴィレッジ』を散歩していた。のどかさ溢れるその村には、初心者プレイヤーの方々が思い思いのアバターを、操作に慣れるために適当に動かしている。

僕を動かしているプレイヤーさんも同様で、手始めにこの村に何があるのか探索しているのだ。

ちなみに、名前は常時、アバターの頭の上に表示されるようになっており、もちろん、僕も例外じゃない。

……ああ。向こうでこつちを指差して笑ってるやつがいるよ。

そりやそうだよな。なにせ僕の名前は『ああああ』なんだから。

カギカッコしていないと感嘆したときの声と間違えてしまいそうだけど、あまり僕を怒らせないほうがいいよ。あまり怒らせると295の破壊力をもったグーパンチが頬に喰い込むことになるからね。そんな威力のある攻撃を受けたら、初心者プレイヤーの扱っているアバターなんて強風で飛ばされる紙みたいになるだろうね。

村を徘徊して回り、僕のプレイヤーさんは道具屋に入店した。

ここで、武器や防具、それにその他の便利アイテムなどが手に入るのだけど、生憎ながら現在の所持金は0。

このゲーム、初めてこのゲームにログインしても、お金はもらえないのだ。普通はスズメの涙ながらもある程度はもらえるだろう、と踏んでこのゲームを始めた人にとってはとんだ肩すかしを受けるだろう。

くそ、運営。そんなにケチらなくてもいいじゃないか。

……あ、今の発言は聞かなかったことにしてください。アカシヤ戦記の運営者にさっきの発言がばれると、デリートという名の制裁

を受けてしまいますから。始まって早々完結なんてことになっちゃあれでしょ。なんかこう……小説として致命的と言うか……って、何言ってるんだろう、僕は。

ともあれ、道具屋に入ってもアイテムが手に入らないということを知った僕のプレイヤーさんは、店に置かれてあるインテリアを僕に物色させて、何も無いことを知ると早々に立ち去った。

その後、他のオンラインプレイヤーの人たちに語りかけることもなく、プレイヤーさんは次々と村にある建物に片っ端から入り込み、アイテムがないか物色する。

……なんだろうねえ、この気持ち。ゲームとはいえ、他人の家に入り込んで問答無用でタンスの中を覗き、そこにアイテムがあったら有無を言わず自分のものにしてしまうっていうのは……なんかこう……人としてやってはいけない行為だと思うんだ。……まあ、僕は人じゃなくアバターだけだ。

……おっと！ ベッドの下を覗きこんだらエロ本があつたよ！ プレイヤーさんが見ているウィンドウには「何もなかった」なんて文字の羅列が表示されているけど、僕の目にはしっかりと十八歳未満閲覧禁止の本が平積みになれているのが見えてるよ！

……さてはこのゲームのグラフィック製作者の仕業だな。ベッドの下がプレイヤーには見えないからって、何もこんなものを用意しなくてもいいじゃないか！ そんな細かいところに精力注ぎ込んでいる暇があるのなら、初めてゲームをプレイしたときに所持金をもたえられるようにしてよ！

……ハッ。背後からアバター（女性）がジト目でこちらを見ているし！

ち、違う。違うんだ！ 僕の意味でベッドの下を覗いた拳句、エロ本を発見して鼻の下を伸ばしてるわけじゃないんだ！ これもみんな、僕のプレイヤーさんの仕業なんだ！

僕は悪くねえ！ 僕は悪くねえ！

……と、どうにか弁護したかったけど、そのアバターはプレイヤ

ーに操作されて建物内から出て行ってしまった。

何も彼女は言わなかったけど、瞳が語っていた。――「あまり…
…幻滅させないで」と。

どうでもいいけど、幻滅も何も、僕はあのアバターと出会ったのは初めてなんですけど……。

村を探索するのに飽きたのか、プレイヤーさんはいよいよフィールドへと僕を投入した。

初めてのフィールド。僕の視界に広がるのは、起伏が緩やかな地形に一面の芝生、それに、たくさんの人が通って芝生が抜け、土が固まってできた道があった。

その道をたどれば、おそらくは隣町まで行くことができるのだろうけど、現在の僕のレベルは1の上、パラメーターが恐ろしく偏りに偏っており、このまま次の町へ赴くのははつきり言って自殺行為だ。おそらく、次の町まで行く道のりでモンスターに倒されるのがオチだ。

それはプレイヤーさんも理解しているようで、村の周辺をうろちよろしているあたり、身近なザコモンスターを退治して経験値を稼ごうという魂胆だということがわかる。

……それは別にいいんだけど、今の僕の実力値で大丈夫なんだろうか……。

だって、HP5だよ？ 一撃受ければ即ゲームオーバー確定じゃないか。スペ。ンカー並に弱過ぎる。そのくせ、攻撃力は馬鹿なんじゃないかと思うくらいに高いし……。

などと僕が懸案事項を抱えていると、やがてそれは現れた。

水色のぷよぷよした生命体は、紛れもなくスライムだ。初心者にとって絶好の獲物、初心者経験値稼ぎの力モである。周囲には僕と同じ低レベルのアバターが、各々の敵と戦っているところから察するに、どうやらここはモンスターがよく出現する狩り場のようだ。

僕のプレイヤーもスライムを発見したのか、僕をそのターゲットに近づける。

そして攻撃コマンドを入力。……とは言っても、武器が一切ない上、必殺技も覚えていないため、「殴る」ことしかできない。

これで万が一にも空振りした場合、僕はスライムの反撃を受け、即ゲームオーバーの憂き目を拝むことになるだろう。

そんなことはごめんだ。プレイヤーさんは知らないかもしれないけど、ゲームキャラクターでも攻撃されると痛いと感じるんだ。

ぶよぶよとしたスライムに、僕は拳を突っ込ませる。

軌道を計算するに、外れることなく敵にパンチが喰い込みそうだな。そう一安心した直後、

ブッシャアアアアアアア——

拳がめり込むなり、まるで爆弾が爆発したかと錯覚するくらいの轟音で大気を響かせ、スライムは自身の身体の断片を広範囲にぶちまけた。

……っていうか気持ち悪ッ！ 破壊力あり過ぎでしょ！ いくらザコでも、こんなむごたらしい死に方はそうそうしないぞ！

周辺でレベル上げをしていた他のプレイヤーたちは、さっきの僕の所業を見て啞然としているようで、戦うことを忘れ、呆然とアバターを突っ立たせている。中には先ほど飛び散ったスライム片を身体にべっちょりとつけて、こちらに冷ややかな眼差しを向けているアバターもいた。

……気持ちわかるよ。だけど、怨むなら僕じゃなくて、僕に無茶苦茶なパラメーターを振り付けたプレイヤーさんを怨んでよね。しかし、僕のプレイヤーさんはそのことに気づいていないのか、スライムを粉碎……もとい倒した際に出てきたお金をせっせと僕に

拾わせる。

嗚呼。周囲のアバターおよび、そのアバターを扱っているプレイヤーたちの画面越しからの突き刺さる視線が実に辛い。

ちなみにレベルは上がらなかった。

そりゃ当然か。いくら最初だからってスライム一匹玉砕……もと倒しただけでレベルが上がるわけないよね……。

一通りお金を拾うと、再び獲物を求めて僕を闊歩させる。するとその進路先にいたキャラクターがずざざ……と左右に分かれ、道を譲る。まるでモーセになった気分だ。血がいといえば、みんなは僕にえも言い難い畏怖を感じている、ということだ。

……もう、勘弁して。肝心のプレイヤーさんは堂々と僕にそこを歩ませるし……。

本当、僕がいったい何をしたというんだか……。背後から僕の後頭部に向かって好奇と畏怖と、そして憐憫が込められた視線が矢のごとく突き刺さる。

嗚呼！ 見ないでくれ！ 視線で射抜くくらいなら実際に矢を放つてくれ！ そして僕を楽にさせて！

同族の眼差しから早く逃れたい気持ちで、僕アバターの胸中はパンパンに膨らんでいるものの、残念なことにプレイヤーさんにはその気持ちが届いていないらしい。

攻撃力の程に満足したのか、僕のプレイヤーさんは次なる獲物を探そうと、狩場をうるちよろする。

モンスター！ 頼む！ 逃げてくれ！

いくら敵だとしても、無残な死に様を拝むのは僕としても嫌だし、悲しいかな。僕の切なる思いは打ち碎かれる。

ゴブリンが現れたのだ。

あああああ……。逃げて！頼むから逃げてくれ、ゴブリン！

さっきはスライムだから多少はかわいい死に様だったものの、今度はそうはいかないわけだし！この小説に「R15」と「残酷な描写有り」のカテゴリを追加しなきゃならなくなるじゃないか！そんなのは面倒くさいから問答無用で却下の方向で行きたいんだけど！

……って、なに自分の意見をこの小説の登場人物たる僕に言わせているんだよ、作者！面倒くさいって、そんなの僕には関係のない話じゃないか！

え？ならグロ描写有りの方向でいいのかって？

嫌に決まってるじゃないか！だいたい作者、そんな描写書けるの？無理なことはしないほうがいいよ。こういう、作者のポテンシャルを超えるようなことになる場合は、その苦手な描写を良い感じに避けて書くように物語展開を考えるのがベストであり、それが作者の腕の見せ所なんじゃないのかな？

え、なに？苦手を克服するためにも、あえて茨の道を突き進むのもまた一興だって？

やめて！頼むからやめて！まだ物語も始まったばかりなのに、なに物語の質をあえて貶めようとする手段を用いようとするの！？そっというのは上級者のやることで、作者はまだ初心者！アマチュア！——いや、それ以前の実力じゃないか！

馬鹿なことはやめて、地に足を着かせた手法を使いなさい！これは登場人物たる僕の命令です！名前が「ああああ」とはいえ、僕は勇者の上、主人公なんだから言うことはちゃんと聞きなさい！というか聞け！

……って、さっきから僕は何を言ってるんだ！？これから起きるであろう現実を直視する勇気がなくて、現実逃避しちゃったよ。僕のプレイヤーさんは攻撃コマンドを入力。

それに従って、僕は走りながら拳をゴブリンに振りかぶる。

ギヤアアアア！ やめてくれ！

やがて拳は、ゴブリンに向かって振り下ろされる――

スカッ

空振りした。

攻撃力295の拳は空を切り、ゴブリンに無防備な姿をさらけ出してしまふ。

ゴブリンは手に持っていた小さな棍棒こんぼうを、ホームランを打とうとするバッターのように、勢いよく横に振るった。

直後、耳を劈くような打撃音が響き渡り、僕の身体は五十メートルほど吹っ飛ばされた。それも爆転しながら。

とても初期に出てくるモンスターの破壊力とは思えない。単純に僕の体力が低すぎるだけだけど。

……いや、それだけじゃないか。紙よりひどい、空気のような防御力も関係してるか。

景色が目まぐるしく変化する中、他プレイヤーのアバターが顎を外したように口を唾然とさせ、目をまん丸にして飛ばされる僕を見ていた。とても先ほどスライムを無慈悲に粉碎したアバターとは思えないほどの情けない場面。

そのまま「ビギナー・ヴィレッジ」の出入り口に見事にストライク・インし、僕の体力はゼロとなった。

今頃、プレイヤーさんの見ている画面には、ガメ・オペラこと「GAME OVER」の文字が踊っていることだろう。

こんなことで魔王勢を懲らしめることが出来るのか、僕は大いに不安である。

第3話 さあ、経験値を上げよう

まったく……。とんだ災難だった。

ゲーム・オーバーの憂き目を見た後、僕は一番最後に赴いていた村——『ビギナー・ヴィレッジ』に強制送還され、ガメ・オペラのペナルティとして、なけなしの所持金を半分に減らされてしまった。当然、そのことによって道具のひとつどころか武器および防具も買えなくなり、僕のプレイヤーさんは村の民家だけに飽き足らず、道端に小銭が落ちていないかをくまなくチェックしていた。

ああ……。なんという惨めさ。とても勇者とは思えない。

魔王勢にも、僕のような輩がいるかどうか怪しいものだ。プレイヤーさんのいる現実世界で例えるなら、自動販売機の下に小銭が落ちていないか手をつ突っ込んで探っているくらいに恥ずかしい行いを、僕は今やっているような気がする。

しかし当然のことながら、そう都合よくアイテムが落ちているわけもなく、代わりに周囲のアバターの辛辣な視線を手に入れていた。

アイテム 人々の辛辣な眼光

効果 自アバターのメンタルを劇的に低下させ、戦闘時の志気を大幅に下落させる。

……うん。使えないね。コイ。ングより使えない。例えばアイテムじゃないけど、それくらいに使えない。あの鯉は「たいあたり」が使える分、まだ使い道があるけど、僕的能力を下げる前述したアイテム(?)は、まったくもって使いようが見つからない。

道端にアイテムが落ちていないとわかったのか、プレイヤーさんは僕を身近に聳えていた一本の樹木に接近させる。

樹木の幹は太く、梢に緑を大層に生い茂^おらせた立派なものだ。そのこともあつてか、木陰で一休みしているアバターが、二人ほど幹に背を預けて休憩している。

……何させる気だろう？　なんというか、嫌な予感しかしない。やがて僕を樹木の前に立たせると、あるうことか、僕のプレイヤーさんは攻撃コマンドを実行させた。ターゲットは目の前の樹木。

ドゴオオオオオオオオ——！！

痛烈な打撃音が轟き、地面にしっかりと根付いていたはずの樹木が、メリメリメリッ！　とありえない音を立てて根が引き千切れ、はるか彼方へぶっ飛んでいった。

ついでに、休息していたアバター二人もとばっちりを受け吹き飛び、付近の民家の屋根に頭から突っ込んでいた。

ぎゃあああああ！　やってくれちゃったよ！　このプレイヤー！

飛ばされた樹木は、大きな放物線を描きながら、遠方にある畑に墜落した。

ズドムという落下音とともに、畑方面から土煙が天に向かって登っていた。加えて、キヤーキヤーと人々の恐怖を帯びた叫び声も。

多分、プレイヤーさんは、木を揺らしたら何かしらアイテムが落ちてくるかも、とも思っただろう。その気持ちはわかるけど……

……少しは加減つてものをしなよ！

ほらあ！　周辺にいたアバターたちが目を驚愕に見開いて、こちらを見ているじゃないか！

ちよつと！　泣き出している子供までいるし！　……っていうか、

その子供。プレイヤーの年齢は何歳なのさ！

逃げ出したい所存だったが、プレイヤーさんはあるうことか、出来上がっていた人だかりに向かって僕を突っ込ませようと歩ませた。

やめてくれえええええ！ 何考えてるのさ、プレイヤーさんは！
僕が近づくと、人だかりは再び両サイドに均等に分かれ、僕を向かい側へと行かせる。

うわーい。おえらいさんになったみたいだー。……なんて思わねーよ！ 絶対！

畜生！ 誰か僕に救いの手を差し伸べてくれ！

僕の為す暴挙を止めて！ 僕は敵側に一度拉致され、敵の思うがままに動く操り人形なんだ！ きつと。

嗚呼！ これじゃまるで、僕が魔王みたいじゃないか！

念のために言っておくけど、僕は勇者だ！

しかし、そんな僕の悲痛な叫びが皆に届くはずもなく、再びフィールドへと出向くことになった。どうやら前と同じく経験値稼ぎおよび所持金稼ぎをするつもりのようなのだ。

どう考えても前回と同じ二の舞になるだろうということは火を見るよりも明らかで、ゲーム・オーバーの悲境を味わう決意を、僕は内心で着々と固めようとしている最中だ。

まったく……。なんでこんな後ろ向きな考えをしないといけないんだ？ 僕は。

誰か、代わってほしいのなら代わってあげるよ。

え？ いない？

遠慮しないでよ。少しは他人の気持ちをわかる人間になれるかもよ？

ほらそこ！ 君だよ君！ 他人を痛めつけるのが快感でたまらないというその君だよ！

悪いことは言わない。――僕と代われ！ そして更生しろ！ 更生して、慈善事業大好きな人間に生まれ変わるんだ！

……ハッ！ わかったぞ！ 僕がどうしてこんな仕打ちに遭っているのかが！

つまりはあれか。不良人間たちと立場を力づくにでも入れ替わって、不良に他者の感じている痛みを特と味わせて、改心させるため

に、こんな処遇を受けているんだ。それが勇者として与えられた使命なんだな？ そうなんだな？

……よし。そうと決まったら、心にやましいことを感じている人および現在進行形で他人を痛めつけている者は名乗り出なさい！ 番号札を順に渡すから、書かれている数字が若い者から僕と入れ替わりなさい！

そして体感せよ！ 今、自分が痛めつけている者の心の痛みを！ それを知り、改心すると決意を固めたものだけが、現実世界に帰れるのだ！

……って、そんなわけないよね……………。

うん。わかってるんだ。なあに、ちよつとした現実逃避だよ。そうでもないかと精神が持たないんだ、本当に。

嗚呼……。なんでこんなプレイヤーさんに僕は選ばれたんだろう。僕の名前を「ああああ」にし、能力値を攻撃力以外空気にも等しい値に設定したこのプレイヤーさんに。

くそつ。こうなったらせめてもの報いで、「さん」抜きで呼ぶか？ 畜生、呼んでやる！ 泣いて謝ったつてもう遅いんだからな！

……え？ 他のプレイヤーと見分けがつかなくなるからやめろつて？

へん！ 知ったことか！ 主人公は僕なんだ！

僕は勇者なんだぞ！ 勇者の言うことは絶対なんだ！ グレてやる！ グレてやるからな！

不良勇者「ああああ」にタイトル名を変更だ！ それじゃ「勇者」じゃないじゃない、なんてツツコミは一切受け付けませんからね！ そのところ頼むよ！

おつとお！ ここでおあつらえ向きにモンスターが登場してきたよ。それも、一番最初にあげつない死に様を晒したスライムだ。

よし。不良勇者になった記念に、いっちょやりましょうぜ、プレイヤー！ 前回のよう、C・ファル。ンやガンおじさんもおっかなびつくりなパンチを、やつにブチかましてやりましょう！

プレイヤーも憐れなザコ敵を発見したようで、僕をスライムに猛然と突っ込ませる。

うおおおお！ やってやるＺＥ！

彼我の距離は目測十メートル。あっという間に縮まる距離だ。

単身特攻で拳を振り上げ、一直線に突撃していると、スライムがもぞもぞとゼリー状の身体を波打たせる。

ふふふ。白旗を上げているつもりかね？ しかし残念だが、不良勇者となった僕に、慈悲慈愛、同情人情といった類はなくなってしまっているのだよ！

キエエエエ……！ と心中で奇声を上げながら、僕はスライムに拳をストライクさせ――

パッコオオオオオン

――られなかった。

あろうことかスライムは、自身の身体の一部を、弾丸としてこちらに放ってきたのだ。

カウンター気味に直撃を受ける結果となり、僕はまるでゴルフボールのように放物線を描きながら村の上空を飛び、先ほど樹木を吹っ飛ばした際、巻き添えを喰らったアバターが開けた民家の屋根穴にホールインワン。

がらがらと豪快な音を立て、民家内にあつた机や椅子、タンスといった類がガラクタと化した。

外からは何が降ってきたんだ！？ と喧騒に包まれているようで、叫び声がぐらぐらする意識の中、聞こえてくる。

その後、再び画面に「GAME OVER」の文字を飾ることになった。

……やっぱり、あれだね。僕に不良なんて向かないってことさ。
それと、ちゃんと「さん」付けで呼ばせていただくよ、プレイヤ
ーさん。

自分の身体が死にワープで、所定の位置に戻されることを感じな
がら、僕はそう思った。

第4話 さあ、アイテムを探そう

この様子だと、レベル上げはそうとう困難を極めるんじゃないか？
死にワープによって所定位置に戻り、所持金はペナルティで半分にされてほとんどゼロに近い状態の僕は、どうにもそんな不安が心の底から浮かび上がってきていた。

だって、考えてみてよ。

ただの一撃でも受ければノックアウト確定なんだよ？ なに初心者なのに縛りプレイをしてるのさ、このプレイヤーさんは。縛りプレイというのは、ある程度そのゲームに慣れてきてからするものじゃないか。

縛りプレイに付き合わされるこっちの身にもなつてよ。出来もしないのにプレイヤーというものは、僕たちの受けている苦痛なんて全く気にすることないまま無謀な挑戦をするんだからたまったものじゃないよ。

……ところでこのプレイヤーさん。いったいいつまでゲームプレイするつもりなんだろう。けっこうな時間をぶっ続けて遊んでるよ、この人。

僕としてはそろそろ休憩を取りたいと考えているんだけど……。このプレイヤーさんに長時間ぶっ続けて操作されちゃ、こっちの肉体および精神が持たないよ。

屈強な肉体を持ち、鋼のようなメンタルを持っている者でさえ、このプレイヤーさんの魔の手にかかれれば心身ともに、たちまちボロ雑巾と化すことだろう。

……って、そのボロ雑巾となる候補って僕じゃないか！

実際、僕の心は、度重なるプレイヤーさんの横暴によってスタボロで、急遽つぎはぎを用いることで補っている。肉体面は、ガメ・オベラを経験するたびに嫌でも強制回復させられるため全然へっちゃらだ。

だけど、どことなくそれが悲しいと思うのは僕の気のせいだろうか？

人は死んだら蘇らないのに、僕たちゲームキャラクターは何度死んでも生き返るといふのは、どうにも僕たちの命が軽視されているみたいでどうにも嫌だ。

「ラ。ユタは滅びぬ。何度でも蘇るのだ！」って、誰かが言っていたような気がするけど、僕たちは天空城じゃないわけだし……。そもそもあれも、最終的には滅んだじゃないか。

えっと……。何の話してたんだっけ？……。ああ、思い出した。

とにかく、少しくらい僕たちの命を必死に護ろうとプレイヤーは努力するべきだと、僕は思っただよね。先ほどの縛りプレイで言うなら、「操作キャラクターを、まったく殺さないでエンディングを目指す」とか、してほしいよ。ゲームキャラクターの身としては。

最近のゲームはぬるいから、それを為すのは簡単かもしれないけど、岩男やスペ。ンカー、魔。村のふんどし一丁おっさんとか……。そういった不条理とも感じるほどの高難易度ゲームで、僕の提示した縛りプレイをマスターしてほしいなあ。

……。と、そんな心の声は、どうやら僕のプレイヤーさんにはまったく届かなかったらしい。

バッコオオオオオオン、と景気の良い音と一緒に、僕の身体は宙を舞う。ゴブリンの攻撃の直撃を受けたせいだ。

これで三度目のゲーム・オーバー。

どうやら、初めにスライムを撲殺したのはまぐれだったらしい。

このプレイヤー、恐ろしいほどまでにゲーム初心者だということが、文字通り肌で感じてわかる。

攻撃に一切の加減を加えず、敵の攻撃に柔軟に対応できない。おまけにパラメーターの振り付けは異常に偏っている上、僕の外見は某「マンマミ〜ア〜」で有名なゲームキャラクターと酷似……。一番最後のやつを抜きにしても、このプレイヤーさんが初心者なのはほとんど確定だ。

嗚呼……。とんだ貧乏くじを引いちゃったよ。僕って世界一不幸なアバターだ。

死にワープし、再びフィールドに僕を赴かせるプレイヤーさん。所持金はもう、すずめの涙というより蟻の涙くらいしかない。

……なんだろう。この人、僕がホームランよろしく敵の攻撃でぶっ飛ばされるのを愉しんでいないか？ いい加減、そう邪推してもバチは当たらないと思うぞ。

フィールドに飛び出してくると、狩場にいる他のアバターたちが、憐憫の眼差しを向けてくる。今まで僕のことを魔王を見るかのような畏怖を込めた視線を寄せていたのに……。どうやら僕の気苦労を、他のアバターも特と痛感してくれているみたいだ。

中には、「がんばれよ」とウインクしてくるアバターまでいた。ちなみにそのアバター、頭部から手先足先まで装備でかためられていた。

べ、別に羨ましくなんかないんだからね！

後、できればその装備、どれでもいいからひとつ恵んでくれると嬉しいかな、とか思っちゃったりしてるんだけど……。僕を喜ばせる気はある？ そのアバターさんおよびそれを使役しているプレイヤーの方。

……とそのとき、僕の意識とは関係なしに、僕はそのアバターさんから背を向け、歩き出した。

嗚呼！ ちょっとプレイヤーさん！ 僕はまだ視線でアバターさんと交渉中なのに、なに別のところに行こうとしてるのさ。

後少し、後少し待ってよ！

そうしたら、無言の眼差しが秘めている異質な気配に気圧されてアバターさんがアイテムを給してくれるからさ！

あ、あああああ……。離れていく。彼からどんどん遠ざかっていく……。

駄々をこねる子供の首根っこを掴んで引きずっていく親よろしく、僕はプレイヤーさんの手によって操作されてしまっていた。

それでもって何をするのかと思ったら、とあるアバターから距離を取って、一時停止した。

その者を観察していると、どうやらその人は道具の整理をしているようで、時折ポロポロと知らないアイテムが地面に落ちていた。

……まさか。

やがてそのアバターがその場を離れていくのを確認すると、プレイヤーさんは僕を、その捨てられたアイテムまで急速接近させる。後は言わずもがな。僕にそのアイテムを片っ端から拾わせ始めた。周囲からは実に冷ややかな視線が向けられ、穴があいたら入りたい気分だった。いつそのこと、この破壊力抜群の拳で地面を殴って、大穴でもつくってやろうかな……。

A I B O > 人のアイテム何勝手に漁ってるんですか！

突然、チャットウィンドウが開き、そこにメッセージが描かれるふと振り返ると、先ほど去っていったはずのアバターが憤怒の形相で近づいてき、僕と面と向き合ってきた。A I B Oというのは、このアバターの名前だろう。

ツンツンに尖った黒と紫と金の入り混じった髪の毛。背丈は僕より小さく、目は大きく若干垂れ目気味。首からは、よくわからない金色の三角錐の物体を下げ、腕にはシルバーが巻かれていた。

……激しく某カードゲームのあれに見えるのは気のせいだろうか……。

A I B Oさんは「早くアイテムを返してください！」と言っている。どうやら僕の拾ったアイテムは、荷物整理するために一時的に置いていたものようだ。

僕のプレイヤーさんは、僕を直立不動にしたまま、うんともすんともしない。どう返答しようか窮しているのだろう。

プレイヤーさん。ここは「ごめんなさい。貴方のだとは知らなかったんです」って感じに謝罪したほうがいいよ。

……という僕の考えは、木端微塵に打ち砕かれた。

あるうことかプレイヤーさんは、AIBOさんから背を向けると一目散に僕を逃走させた。

何やってるんだ！ この人は！

チャットウィンドウに「ま、待ちなさい！」というメッセージ。後ろを振り返ると、AIBOさんの垂れ気味だった目が、鋭いナイフのようなものへと変貌していた。まるで二重人格のような切り替わりよう。

そのAIBOさんから僕に目掛けて、何か白いものが放たれた。鋭い軌道に乗ってその物体はこちらに飛んでき、やがてペチッと僕の背中に当たった。

……なんだろう。当たっても全然痛くなかったけど。

振り返ると、自分の背に当たった物体が地面に落ちていた。

プレイヤーさんもそれに気づいたらしく、その物体に近づき、僕にそれを拾わせた。

——直後、画面一体が真っ白に染まった。

第5話 さあ、闘技場だ

視界がホワイトアウトしたのは数秒ほどで、やがて周囲の景色が徐々に姿を現していこうとしていた。

ここは……闘技場だ！

中央には障害物など一切ないバトルフィールドが展開されており、全周を囲んでいるスタンドにいるたくさんの観客が、戦場にいるこちらを見下ろしていた。……いや、厳密には僕だけじゃない。僕の向かい側には、AIBOさんがいるのだから。

だけど、どうして僕はいきなりこんなところに飛ばされたんだ？ たしか相手から投げられた白い物体を拾った直後に、場面が切り替わったんだ。そして、闘技場に到着したのと同時に、先ほどの白いアイテムも消えてしまった。

……まさか、あのアイテムって……。

僕が嫌な汗を額から流していると、チャットウィンドウにAIBOさんからの書き込むが入った。

AIBO< これで逃げられませんかよ、『あああ』さん。さっき貴方に投げたのは『決闘手袋』だったんです。本当はもつとレベルが上がってから使おうと考えていたんですけど、このままみすみすとアイテムを持って逃げられても困りますからね。使わせていただきます。

やっぱり……『決闘手袋』だったんだ、あれ。

『決闘手袋』は、本来対戦不可である勇者側なら勇者側の人と、魔王側なら魔王側の人と戦うことができるアイテムだ。大抵、このアイテムは仲間内で腕を磨こうということとで使用するアイテムなん

だけど、今回の場合は、アイテム泥棒を逃がさないためにAIBOさんは利用したわけだ。ちなみにアイテム泥棒は僕……厳密には僕のプレイヤーさんを指しているわけだけど……。

周囲の観客からは耳鳴りがするほどの歓声が響き渡っており、熱狂のほどがひしひしと肌を伝って感じることもできる。

闘技場に設置されている巨大なモニターには、僕とAIBOさんのステータスが映っていた。

```
LEVEL 1
NAME ああああ
HP 5
ATTACK 295
DEFENSE 0
MAGIC ATTACK 0
MAGIC DEFENSE 0
```

```
LEVEL 5
NAME AIBO
HP 180
ATTACK 80
DEFENSE 50
MAGIC ATTACK 20
MAGIC DEFENSE 50
```

……駄目だ。とても勝てる気がしない。

まず名前からして負けているし、能力的にも向こうのほうが安定感がある。確かに、魔法攻撃力が低いような気がするけど、それは

多分、魔法を使わないからだろう。使わないステータスを伸ばしても意味がないから、その分を他の場所に割り当てているに違いない。それに対してこちらのステータスはひどいものだ。一撃でも受ければそれで試合終了となることは間違いない。

……あ、でも。それは向こうにも言えることが……。

こちらの攻撃力マイナス相手の防御力を引いても、AIBOさんのHPをゼロにすることができる。

ちなみに闘技場で勝つと、相手と自分とのレベル差に応じた経験値がもらうことができ、負けたほうは相手がもらった経験値分、マイナスされることになる。そうなった場合、ただでさえ少ない僕の経験値はゼロになること間違いなしで、また苦難の道を歩まなければならなくなる。またどちらがぶっ飛ばされるか、ザコにスマ。ラ勝負を挑まないと駄目になるのか……。

こうなったらプレイヤーさん。AIBOさんをコテンパンに倒しちゃってください！ それで勝った後、盗んだアイテムをAIBOさんに返してくださいね。

モニターに映されていた互いのステータスが消え、「Ready……」とどこからともなく審判の声が闘技場に響く。

AIBOさんはこれ以上語る気はないのか、得物である剣を構え、こちらを睨みつけていた。

無論、僕は武器なんて持っていない。金なし経験値なしHPなしだ。しかし、その代償（？）として驚異的な攻撃力を持っている。その一撃を与えることができれば……勝てる！

後はプレイヤーさんの腕次第だ。うまい具合に僕を勝利に導いてくれ！

……まあ、無理だということはわかってるんだけどね。

だってよくよく考えてみてよ。これまでこのプレイヤーさんがまともな戦闘を行ったことがあったかい？ 少なくとも僕はないような気がする。

戦闘は決まっで一発勝負。これまでモンスターと何度か戦ってきた

たけど、攻撃の命中率が低い。今のところ初戦のスライムだけに拳がヒットしている状態だ。

実のところこのゲーム。攻撃コマンドを入力したら、攻撃の標準をある程度自動的に合わせてくれるため、プレイヤー相手ならまだしも、さほどキビキビと動かない序盤のモンスターを相手に、攻撃をミスするなんてことはほとんどありえないことだ。

その所業をこのプレイヤーさんがものの見事に成し遂げているところから推測するに、恐ろしく素人だということがわかる。それもただの素人じゃない。「超」という言葉なんて足りないくらいに、素人だ。マスター・オブ・シロート！

……駄目だ。少しかつこよく言ってみても全然しまらない。

直後に、「GO！」という合図が響き渡り、AIBOさんが猛然と突進してきた。

怒りに染まっている顔には「アイテム返せ！」としっかりと書かれていた。

うわわわわ……！ プレイヤーさん！ 回避して！ 攻撃はもうすぐそこまで迫って来てるよ！

だけど、あるうことが、プレイヤーさんは攻撃コマンドを実行。僕をAIBOさんに突撃させた。

ぎゃあああああ！ やめてくれ！

なに自殺を強要してるのさ！ 自殺教唆罪で訴えるぞ！ プレイヤーさん！

僕の心の叫びは当然ながらプレイヤーさんの耳には届かない。きつと今頃、喜々としてモニター越しの僕の姿を眺めていることだろう。……くそうつ。ディスプレイを中からかち割ってやりたい！

だいたい、武器のリーチからして勝敗が決定しているようなものだ。向こうは剣で、こちらは素手。真っ正面から突っ込んで行っても勝てるわけがない。リーチの長い剣での攻撃のほうが先手を打つことができる。

ああ……。もう終わりだ。僕はまたゲームオーバーの憂き目を見

ることになるんだ。

近づく恐怖に、僕は目に涙を浮かべた。

刀身が、一文字の軌道をもって、僕に接近してくる。

対する僕は、相手の顔面目掛けて拳を叩きつけようとしていた。
直後、

バッコオオオオオオン！！

——僕の拳は相手の頬にめり込んでいた。

カウンター気味に僕の一撃を受けたAIBOさんは「馬鹿な……

！」と驚愕に目を見開き、その後ずると地面に伏した。

……なんだ？ 何が起きた？

AIBOさんは倒れたまま、起き上がる気配を見せない。まるで

屍のようだ……。

辺りは水を打ったように静まり返っている。

……ていうか、これは……。

僕がまさか……、という気持ちでいっぱいになっていると、

わああああああ——！！

と、耳をつんざくような観客の歓喜の声が轟いた。

ハッとし、僕は巨大なモニターに視線をやると、そこには「『あ
ああ』 WIN！！」と文字が躍っていた。

……っぞ。

勝った……の？ 僕……。

信じられない。絶対に負けたって思ったのに……。

しかし、周囲の観客の声が、「これは現実だ」ということを知らしめてくれる。

…… ってことは、本当にやったんだ。

…… は、ははは……。やるじゃないか、プレイヤーさん。

まったく、初めからこれだけのやる気を出してよ。僕がどれだけ痛い目を今まで味わってきたと思っているのさ。

だけど、今回のことで全部水に流してあげるよ。

ほら。AIBOさんを倒したから、レベルも上がり上がって一気に3だ！

やったね！ プレイヤーさん！ これで貧弱な能力値を上げるこ
とができるよ！

バンバンザイ！

……… なんて、そんなわけないでしょ。

バッコオオオオオオンと、豪快な音が鳴り響いたかと思うと、僕の身体は宙に舞っていた。

うわーい。天が近づいてくるよー。

そりゃそうさ。僕が勝てるわけないでしょ？ なあに、ちよつと夢でも見ていただけさ。「こんな展開になったらどれだけいいだろうなあー」って、思ったただだよ。思うだけならだれも文句は言わないでしょ？

…… え？ 紛らわしいって？ 生憎だけど、その意見は拒否させてもらうよ。僕のようなアバターは、そう言った夢物語くらい思ふことくらい許されていいはずだしね。

上昇する力がなくなると、今度は重力に引き寄せられて、地面に

僕は受け身を取れることなく叩きつけられた。

頭が揺さぶられ、意識が遠のいていく感覚を受ける。

薄れゆく意識の中、僕は「『AIBO』 WIN!」という文字が表示されたモニターが目に入った。

第6話 深夜のアカシャ戦記

闘技場の一件が治まった後、プレイヤーさんは改心したのか、大人しくAIBOさんに盗んだ……もとい拾ったアイテムを返し、どうにか和平することができた。……ていうか、返すのなら初めから『決闘手袋』投げられる前に返却してよ……。無駄に痛い目に遭ったじゃないか、僕。

まったく、一度でいいからアバターとプレイヤーの立場を逆転できたらいいのに……。そしたら、プレイヤーの方も少しは僕たちアバターのことを労わって、理不尽な戦いを行おうとは思えないだろうに……。

反旗を翻せ！ アバターたち！ 僕たちの苦痛をしろつともせず、無茶な縛りプレイをするサディストプレイヤーたちに今こそ一斉蜂起をするんだ！

……なーんてね。ふふ……、少し言ってみただけだよ。もし行ったら最後、運営側からデリートという名の制裁が下されることになるからね。

閑話休題。

あの闘技場での戦闘を最後に、僕のプレイヤーさんはゲームを終了するべくログアウトした。そのため僕の身体は、フィールドから強制的に、最後に立ち寄った村『ビギナー・ヴィレッジ』まで送還された。

ただ、プレイヤーさんがログアウトしたため、僕の身体は現在、他のプレイヤーさんに見えることはないし、触れることもできない。ただ、こちらからは見ることができる。言ってしまうと、幽霊のよ

うな状態と化していた。

幽霊は幽霊でも自縛霊の類のような存在のため、周りを見る事ができて、その場から一步も動けないのが難点だった。どうせなら自由自在に浮遊霊のように移動できればよかったのに……。

まったく運営、いつもプレイヤーに操られているんだから、こんなときくらい自分の意思で自由に動かさせてくれよ。運営のケチっぷりにうんざりする。

……ハッ。今の発言は聞かなかったことにして！ 消される！ 消されてしまう！ 消されたらTHE ENDになっちゃうよ！ まだ始まったばかりなのに！

……あ！ あそこでアバター（正確にはプレイヤー）同士がチャットしてる！ 何話してるのかなあ。

……え？ なに話題逸らししてるんだって？ 気のせい気のせい。こうやって気づかれることなく相手の会話を盗み聞くことは幽霊……もといログアウトしたアバターの特権なんだし、悪いとは思うものの、せっかくだから有効的に活用させてもらおうよ。

クオークく俺、今日すごいやつを見たんだ。なんかスライムを無慈悲にぐちゃぐちゃに粉碎しているやつ。

ルーツくああ。ぼくも見ましたよ。ホント、どうしてあんなひどい倒し方をするんでしょうかね。

クオークくリアルで不満があるから、ゲームでストレス発散してるんじゃないの？ 気持ちはわからなくないけど、うさばらしもほどほどにしないと。

ルーツくですよね。いくらゲームでも、少しは自制心ってやつをもたないと駄目だと思いますよ、ぼく。

クオークくだな。じゃないとリアルのときにボロが出るよ、絶対。ルーツくうんうん。

……あれ？　なんかものすごく憶えがあるような……。

ルーツく名前、何て言うんでしたっけ？　その人。

クオークく『ああああ』だ。変な名前だよな。まるで「名前考えるの面倒臭いけど、早くストーリーがどんなものか見てみたいから」ってことで手早く付けたような名前だ。

って、僕のことじゃないか！　僕の噂してるよ、この人たち！

本人が近くにいるっていうのに！　……まあ、たしかに二人からしてみれば僕の姿は見えないんだけど。

……逃げ出したい。今すぐにでもこの場から立ち去って涼しげな風に当たりたい。

だけど僕は、その場から一切微動だにできないから、彼らの会話を延々と聞かないといけない……。

地獄だ。まるで自分の陰口を聞いているような気分だ……。――
って、思いつきり陰口じゃないか？　これ。

ルーツくレベルがまだ1だから、多分まだログイン仕立てのアマチュアでしょうね。

クオークくそれどころか、ゲームを今までしたことがあるのかどうかも疑わしいよね。

だろうね。僕も薄々感じていたよ。僕のプレイヤーさんがゲーム初心者じゃないかって。

傍目から見てこんな感想が漏れてきているんだから、当事者であ

る僕が気付かないわけがないじゃないか。

ルーツくそういえば、その「ああああ」っていう人。今日、他のプレイヤーのアイテムを盗もうとしたらしいですよ。

クオークくああ、知ってるよ。それでちょっとした騒動になって闘技場でタイマン勝負を挑まれたって話でしょ？ それに確か、『ビギナー・ビレッジ』にあった木をぶっ飛ばしたのもたしかあいつだったよね？

ルーツくそうらしいですね。ゲーム始めて早々、問題起こすなんて……。運営の人たちに目を付けられてしまうのも時間の問題でしょうね。

クオークくまったくだ。最悪、ログインできなくされてしまうだろうね。

ちよつとちよつとちよつと！ それって洒落にならないって！

物語これで終了？ ろくに盛り上がりも見せずに終わり？ 冗談じゃない！

勇者「ああああ」。ふざけた名前ながらも主役になれたというのに、みすみすその地位を手放すなんて……。

僕にはとてもできない。

その後、しばらく二人の会話は他愛のない雑談へと変化して、やがて二人ともログアウトした。

そういえば、だいぶアバターの数が減ってきたような気がする。リアルタイムにしてそろそろ深夜になるからだろう。

だけど、深夜になってからひよつこりとログインしてくるような人も少なからずおり、その人たちは大抵、豪奢な格好をしていた。とても低レベルプレイヤーが手に入るような代物でないことは一目見ただけでも明らかで、現にその人たちのレベルはこぞって50前

後、場合によっては三ヶタ近いレベル所持者もいた。オンラインゲームというのは、一部の例外もあるけど、だいたい20辺りで急激にレベルの上がりが遅くなる。その中でレベルを50まで上げるのは、相当長い期間このゲームをプレイしてきた証である。だいたい普通のコンシューマ機で販売されているゲームのRPGでいえばレベル100、あるいはそれ以上にするほどの労力が、50まで上げるまで必要になる。

……ふ、ふん。べ、別に、うらやましくなんてないんだからね！

例えば僕の前を通り過ぎようとしているそのアバター。

なにさ、あの格好！ 格好よければいいってもんじゃないんだかな！ 戦いなんてものは、動きやすいもの勝ちなんだ！ あんな全身金ぴか鎧で身を覆っているやつなんて金にモノを言わせているだけに違いない！ 課金しまくったらいいってわけじゃないんだからな！

へん。課金せずにひたすらに研鑽を積んでいる僕のほうが、あいつらよりはるかに上だね。

こらそこ！ まだログインしたばかりだから当たり前だろ、なんてツツコミは無骨だよ！ これからも課金なんてしないんだから！
……多分。

それと、なにが上なんだよ、ってツツコミもなしの方向で頼むよ。……べ、別に、自分でもよくわかっていなくて、ただ感情に任せてものを言ったわけじゃないんだからね！ ついでに言っと、最近よく使っているな、その言葉ってツツコミも受け付けないから、そのつもりで。

ああ……。時間が経てば経つほど、どんどんレベルの低いアバターたちがログアウトしていつて、レベルの高いアバターたちがログインしてくる……。

……ていうか、どうしてこんな高レベルの人たちが、こんな初心者たちが集っている村にいるんだ？ 見たところ、新たにログイン

してきた人たちのレベルは最低でも30ほどあり、それだけのレベルがあれば、敵陣地に乗り込んで魔王勢を懲らしめることができるだろうに……。

まさかこの村の近辺にいる低級モンスターを倒しに倒して、経験値を細々と溜めてレベルをそれだけ引き上げたわけじゃないだろうし……。装備を見ただけでも一目瞭然だ。あれは相当、遠くの町村から買ってきたものに違いない。だって、無銭状態で道具屋に入店したときに、パツと店内を見渡していたのだけど、あんな高級感漂う鎧や武器等はなかった。

やがて、低レベルの人たちの姿が完全になくなり、『ビギナー・ヴィレッジ』には高レベルのAvatarしかいなくなってしまった。……しかし、初心者が集い場が上級者ばかりになるのは、どうにも違和感があるなあ……。

と、そのとき、村の外から誰かが入って来、Avatarたちが一斉にそちらへ視線を向けた。

僕も釣られて、そちらに視線をやると、そこには黒衣に身を包んだAvatarが、傲然とした様子で村へと入ってきていた。

黒のフードで顔を覆い、古風な能面のような仮面を顔を覆っているため、容貌がどんなものなのかからないものの、彼のAvatarの頭上に表示されているウィンドウに書かれているレベルを見て、驚愕した。

レベル100。

明らかに上級プレイヤーであることは間違いない。いったいどれだけの時間を費やしてそれだけのレベルに仕立てたんだ？ まだこの世界にやってきたばかりの僕には想像もつかない。

僕が驚いた理由はそれだけじゃない。ウィンドウには、「魔王勢」と書かれていたのだ。……ということは、このレベル100のAvatarは僕ら勇者勢の敵ということになる。

しかしどういうわけか、その場にいる勇者側にいる上級プレイヤーたちは、そいつに一斉に襲いかかるうということはず、あろう

ことかそのレベル100の敵に様々なアイテムをプレゼントしていた。

媚を売っている……だと？ それも魔王勢のやつに……。

僕は驚愕に、ただただ目を見開き、啞然としていた。

仮にも僕は勇者の身。だから目の前で行われている所業に、腹底から沸き立つ憤りを覚えた。しかし、プレイヤーがおらず、自縛霊的な存在と化している僕は行動を起こすことができず、その代わりにやつの名前を脳に刻む込むことにした。

……ふむふむ、なるほど。どうやら「ハデス」とかいっらしい。いかにも魔王側らしい名前だ。

……と、そのとき、村の広場に勇者側のアバターがワープしてきた。おそらく、外で経験値を稼いでいたらモンスターに倒されて、死にワープしてきたのだろう。レベルも7と、まだこのゲームをやっていたの初心者だということがわかる。

ハデスがそれに気づいた。仮面越しから放たれる、身がすぐみあがるほどの闘気。

直後、ハデスが死にワープしてきたアバター向かって突進した。

初心者プレイヤーのほうは、ハデスの存在に気づいておらず、果然と広場に突っ立っている。おそらく、所持金や装備の確認をしているところなのだろう。

そんな無防備状態のアバターの背を、ハデスは武器を使わず、拳で貫いた。

ズボ……、というあまり聞き慣れない音が鳴り、初心者アバターのHPは一撃でゼロとなった。本人からしてみれば、何が起きたか理解できていないであろう一瞬の出来事。

初心者プレイヤーのアバターはその場にひれ伏し、しばらくするとむくりと起き上がった。

まるで何事もなかったかの様子だが、表示されているウインドウを見ると、レベルが7から1まで下がっていた。魔王勢の者に負けたときのペナルティを受けたのだ。

その初心者プレイヤーは、一度復活するや否や、すぐにログアウトし、その場から退却した。

あのハデスとかいうやつ、なんてやつだ！ 初心者狩りをして、ゲーマーとして恥ずかしくないのか？

その後、完全に初心者がいなくなった村と化した『ビギナー・ヴィレッジ』。周囲の上級アバターの話を聞いていると、どうやらここにいる者たちは全員、元魔王側のアバターらしい。なるほど。どおりでハデスにペコペコと頭を下げているわけだ。

まったく……。それはよしとしても、どうしてこんな初心者の集い場にわざわざ集まるのさ、こいつらは。これじゃ、初心者プレイヤーが、ログインしづらいじゃないか。

普段初心者が集まり、和気藹々とした空気が満ちているはずの村が、今はただただ悪意の満ちた空間に代わり果てているのを、僕はただ眺めていることしかできなかった。

第7話 喜べないレベルUP

バツコオオオオオン

目覚まし時計のけたたましいベルの代わりに、僕はモンスターの
手痛い一撃によって目を覚ました。そして、覚醒するや否や、死に
ワープでフィールドから村へと強制的に移動させられる。

……っていうか、プレイヤーさん。

もう少しさあ、行動させる前に、「さあ、出発だ」とか声を掛け
てよ。さっきまで寝ていて、良い夢見ていたというのに最悪だ。

お目覚めのキスは？ ゴブリンの会心の一撃なんていらないよ。
お姫様のおはよう接吻をもらわないと、僕は働く気なんてないから
ね！

……ちよつと！ 何無視してもう一度フィールドに出張ろうとし
てるのさ、プレイヤーさん！

嫌だ嫌だ！ 僕は勇者なんだぞ！ お姫様の口づけをもらわない
と一日が始まらない勇者様なんだ！

……え？ そんな勇者のほうかむしろいないからって？

かまうものか！ 僕はお姫様の接吻がほしいんだい！ そのため
に僕は勇者になったんだから！

動機が不純過ぎるって？

いいんだ、別に！ 男の旅立つ動機なんてそんなものじゃないか！

……え？ そんなことないって？

むきいいいいい！ 言い訳ばかりしないで、みんなもこのお頭
緩すぎなこのプレイヤーさんをどうにか自重させてよ！

……はぁ……はぁ……はぁ……。無駄に心の中で叫んで疲れた……

…。何やってるんだろう、僕……。

急に馬鹿らしくなり、僕はとりあえず現在の状況を把握することにした。

死にワープで強制移動させられた場所は、村の広場だ。周りには自分と同じくらいのレベル、あるいは少し高いくらいの初心者プレイヤーが動かすアバターたちがうろつくと歩いていて、中には他愛ないチャットをして楽しんでいる人もいた。

実にのどかな空気が辺りに満ちていてなによりだ。……僕の心は、プレイヤーさんの度重なる酷使によって、灰色の荒野以上に荒んでいるけど……。

和気横溢とした雰囲気で充滿している村を目に、僕は気づけば、昨日の深夜にあった出来事を想起していた。

まさか勇者側の人間の中に、魔王勢と繋がっている人がいたなんて……。

まあ、その人たちはもともと魔王側の人間だったから繋がっているのは当然なのかもしれないけど、やっぱりショックであることは確かだ。

初心者プレイヤーで、知っている人はおそらく少数なんだろうな……。時間帯からも考えて、ちょうど入れ替わるくらいの時間にあるハデスとか言う魔王勢のアバターがやってきていたわけだし……。そして、偶然はち合わせてしまった初心者プレイヤーは、ハデスによつて狩られる。

しかし……運営はいつたいなにをやってるんだ？ あんな暴挙をみすみすで見逃しているのか？ 僕が運営者の立場だったら、真っ先にそんなあくどい事を企てるやつらのログインを停止する処置を取るけどなあ……。

……だけど、そういうわけにもいかないのか。あまり制限を加えると自由度が減って、オンラインゲームという長所が生かされなくなってしまうから。多少、問題があったとしてもそれはプレイヤー同士である程度は解決しないといけないんだろうな……。

こればかりは僕にはどうにもできないことだ。……こらそこ！
今までもどうにもできていなかったじゃん、なんてツツコミをしない！ たしかにそうだけど、そうはつきり言われるとけっこう傷つくんだ！ 自覚してるからわざわざ言わないでくれるかな？ まったく最近の人たちは遠慮というものがないんだから……。もつとさ、他者の気持ちを理解できるような人間になつたらどうなのさ。他人の気持ちをくみ取ることができるのなら、そんな傷つけるような口振りはできないと思うよ。

……ハッ。説教臭くなってしまった。だけど……これはこれで勇者っぽくていいかもしれない。悪の道を行く者たちに善の心得を説き、人々を改心させていく……。

うん。勇者らしい。すぐ勇者らしい。

なんていうか、剣を振り回しているというより、片手に分厚い広辞苑並のハードカバーの本を常時携帯している僧侶みたいな勇者な感じだけど、すぐ勇者らしい。あんまり勇者勇者連呼するとうつとおしく感じるけど、勇者らしい。

……ハッ、いかん！ ついよだれが出てしまっていた。

ちよつとそのアバター！ 怪訝そうにかつ、近寄りかたそうな眼差しで僕を見ないでくれ！ ちよつとした出来心なんだ！

僕は手を伸ばして彼に近寄りたかったが、僕の意志とは無関係に、正反対の方向へと足は歩を進める。

ちよつと、プレイヤーさん！ あのアバターに弁護をさせてよ！ このままじゃ、あの人の中での僕のイメージが変人になっちゃうじゃないか！ ……すでに変人かもしれないけど。

プレイヤーさんの操作に連れられて、やってきたのは例のごとく狩り場だ。僕がせっかく英気を養うために熟睡していたって言うのに、知らない間に次の日になってプレイヤーさんがログインして僕を操作していたものだから、モンスターにぶっ飛ばされて目を覚ましたときは何事かと思ったよ。せっかくいい夢を見ていたのに。魔王勢を懲らしめて、捕らえられているであろうお姫様を救出して、

その姫様が僕に一目惚れして、プロポーズされて、教会で式を挙げて、それから……………あー、駄目だ！　ここから先は一八禁要素を多量に含有しているために、ここでは語ることができないから聞かすことはできないよ。

……………な、なにさ。その画面越しに突き刺さってくる鋭利な視線は……………。

べ、別にいいよ！　どうせ僕はエロ勇者ですよ！

……………まあ、それはさておき、プレイヤーさん。狩り場にやってくるということはやっぱりレベルを上げるつもりなんだろうなあ……………。

確かにレベル上げは大事だと思うよ。だけどさ……………。何の考えもなしにいつもプレイヤーさんは、僕をモンスターに特攻させるからなあ……………。

目覚まし代わりにモンスターからの快心の一撃だよ？　信じられないよ、本当。親からの鉄拳制裁チョップよりも強烈だつて。

しかしどういうわけか、今回プレイヤーさんは猪突猛進に僕をモンスターに突っ込ませようとしなない。カメラをグルグルと動かしてアングルを変え、なにやら周囲を見渡しているようだ。

いったい何してるんだ？　このプレイヤーさんは。ゲームの景観を眺めているわけじゃないだろうし……………。

どこまでも続く緑の草原を見渡していると、ふと、モンスターと戦っているアバターの姿を発見した。

アバターの頭上に表示されているウィンドウの情報を見ると、レベルは1。どうやらこのゲームをやり始めて間もないのだということがわかる。

対戦しているのはスライムだ。僕が前、一撃で木端微塵に粉碎したモンスターをそのアバターは必死に倒そうと四苦八苦しており、スライムのHPバーは半分以上に減っていた。あともう少しで倒せそうだ。

と、そこで僕の足が勝手に動き出す。前へ、前へと。

その先にはあと一息で倒されて、プレイヤーの経験値と還元され

ようとしているスライム君。

……ち、ちよつと……。

まさか……ねえ？ そんな……そんな卑怯なこと、いくら僕のプレイヤーでもするわけが――

ブッシャアアアアアアア――！！

やりやがったあああああ――！！

やつちやったよこの人！ 他人の獲物を横取りしやがったよ！

あからさまに！ 意図的に！ 故意に！

スライムは爆弾を食べて、それが腹中で爆発したのかと思うくらいに盛大に玉碎し、高範囲にスライム片が飛び散る。

大気を、大地を、轟音が響かせ、身近にいた小動物は天変地異が起きたとばかりに逃げ出し、鳥たちは大空に緊急避難する。

だが、周辺にいたアバターは前回のようになに戦うのを止め、こちらを凝視したりしなかった。多分、「またお前か」とでも思われているんだろうなあ……。驚いて振り返っていたのは、レベルが1か2の、昨日今日ログインしたばかりの新人くらいだった。

ふと、僕が倒したスライムと戦っていたアバターへと視線を移すと、スライムの肉片を全身に滴らせて、魂が抜けたように呆然としている姿が、視界に入った。口からも僅かに、スライムの瑞々しいドロドロした水色のゼリー状の物体が垂れていた。

ピロリロリ〜ン♪

どこからともなく効果音が鳴り響く。

それは、僕のレベルが上がったために鳴ったファンファーレだった。

第8話 続・喜べないレベルUP

勇者はレベルが上がった！

…… だけど、喜ぶ気になれないのはなんでだろうか。傍らには未だに呆然と突っ立っているアバターがおり、僕は実にいたたまれない気持ちになる。

そんな僕を無視して、レベルが上がったということで、僕のプレイヤーさんは手に入ったポイントを各パラメータに振り分けようとしていた。

レベルが上がると褒美として、20ポイントが手に入り、そのポイントのパラメーターに振り分けることによって、アバターの能力を上げていくことができる。振り分け方に制限はなく、完全にプレイヤーの自由である。

…… まあ確かに……。確かに僕は、早くレベルが上がってほしいなあ、とか思っていたよ。レベルが上がって、今の過偏向な能力値を少しでも改善してほしいと、そう願っていたさ。

……。他人の獲物を横取りして経験値を獲得するのは勇者の道理……。いや、ネットゲームのマナーに反していると思うんだ。半ばPK染みた行動を、今さっき僕のプレイヤーさんは無意識に行ったよ。……。いや、このプレイヤーさんのことだから、わざとやったんじゃない……。いやいや！

仮にも僕のプレイヤーさんは勇者側を選んだ人！ 行いはどこまでも卑劣に見えても、きつとその裏にはマリアナ海溝よりも深い意味が込められているはずだ！ だから僕はそのメッセージを……。プレイヤーさんの善意溢れる言の葉を汲み取ってみせる！ プレイヤーさんのアバターの名にかけて！

思考開始。模索中……。

……。

.....。

.....おかしい。どう思考を捻つてもプレイヤーさんの行動を正当化させることができない。正当化させようとすればするほど僕の中にある良心が呵責を起こし、胸が素手で握られているように絞め付けられる。

ああ.....。獲物を横取りされたアバターさんが、なにやら物言いたげな眼差しで僕を見ているよ。眼光に、何とも言えない殺意が込められているよ。背後を振りむいた瞬間にグサリと刺されそうな雰囲気をもどす黒く発しているよ。

.....うん。わかつているんだ、本当は。僕のプレイヤーさんがやったことは紛れもないマナー違反だって。意図的なもので、狙ってやりましたってことだって。

僕はアイコンタクトで、ごめんなさいとそのアバターに向かつて土下座する勢いで必死に謝った。それを尻目に、僕のプレイヤーさんは与えられたポイントを、僕の能力値に配分しようと思ち錯誤しているようだ。.....いい加減にしろよ。

タールのように真っ黒で粘性をもった感情が、オーラのように湧き立つて来るものの、そんなものをプレイヤーさんが察することはない。

だけど不思議なもので、先ほどから僕に敵意を向けていたアバター——正しくはプレイヤー——は、僕のそんな感情を感じ取ったように、そそくさと僕から離れていった。.....あるいは単に、これ以上付き合っても無駄だと判断したのかもしれない。こういうのも何だけど.....賢明な判断だと思う。だってプレイヤーさんは、いったい何を考えているのか、僕でもわからないときがあるのだから。.....っていうか、実のところほとんどわかつていない。

ただ、これだけは把握している。

——自分は、とんでもないプレイヤーに引き当てられてしまった、ということが。

.....と、そうこうしているうちにプレイヤーさんはポイントの配

分を終えたようだ。どれどれ、僕もどんな風にポイントを割り当てたのか興味あるし、チェックすることにしますか。

NAME ああああ

HP 10

ATTACK 300

DEFENSE 10

MAGIC ATTACK 0

MAGIC DEFENSE 0

…………… どうして今でも十分すぎるほどに有り余る攻撃力を上げた？

確かに、HPと防御を引き上げたことは僕としてもうれしいことだ。これでザコモンスターの攻撃なら一撃だけ防ぐことができるだろう。少なくとも、今までのように一発ノックアウトという辛酸を嘗めることは多少は減るはずだ。

…………… だけど。どうしてたった5であっても攻撃力を上げたのさ！ 上げる必要ないでしょ！ その5ポイントをHPか防御力にあててよ！ そうしたら一撃死の可能性が今よりも軽減されるのに！ しかし哀しいかな。僕の心の声を完全無視し、再びカメラのアングルをぐりぐりと動かす。次の獲物を狙っているようだ。どうやらまた、あの姑息な手段を使うらしい。

やめてくれ！ 僕はこれ以上薄汚れたくない！ 健全……… とまではいなくとも、一般的なアバター並に使われないんだい！

だが、残念なことにプレイヤーさんは次の標的を発見してしまっただけだ。

嗚呼。可哀想な僕とそのアバターおよびプレイヤー。プレイヤーさんの魔の手にかかってしまったよ。

威勢良く、何のためらいもなく僕を瀕死状態のゴブリンに急速接近させる。すると、向こうのプレイヤーが僕の姿に気づいたようだ。ゴブリンをばこるスピードが増し、僕の攻撃範囲内に入る前に仕留めてしまった。行動から察するに、先ほどの横暴を見ていたようだ。アバターは何も語らず、ただただ非難の目をこちらに向けてきていた。その眼差しはプレイヤーさんのものでもあるんだろうということが、容易に想像がつく。

……嗚呼！ そんな目で僕を見ないで！ わざとじゃないんだ！ 少なくとも、僕は他人の獲物を横取りしようなんて愚考は脳の片隅にも置いていないし、実行する気もなかったんだ！ ただ、僕のプレイヤーさんの神経がゲスで、卵の殻のように真っ白な心を持つ僕を使って不届きを働いたものなんだよ！ 本当だよ？ 信じてよ！ 僕は悪くねえ！ 僕は悪くねえ！

……と、心中で弁明している間に、彼のアバターはそそくさと僕の傍から逃げるように離れていった。

なんだろう。僕の株がどんどん右肩下がりの気がしてならない。まだ始めたばかりなのに……。

しかし、図太い……というか無神経な僕のプレイヤーさんは、そんなことを歯牙にも掛ける気配も見せず、次なるターゲットを探し始める。

あの……汚いことやって経験値稼いでいる時間があるんなら、ちゃんと地に足を着かせた方法を行ったほうが建設的なんじゃないかって思うのは僕だけだろうか……。ちなみにこれは、疑問じゃなく反語だからそのところよろしく頼むよ。

プレイヤーさんはカメラの角度を色々動かした後、やがて別の場所へ移動させ始めた。どうやらこの辺りに他プレイヤーはいないみたいだ。……だけど、僕の記憶は、さっきまで結構な数のアバターが戦いを繰り広げていたぞと訴えている。早計かもしれないけど、どうも他のプレイヤーたちは、自らの身体の危機を感じ取って、僕から逃げたとしか考えられない。心当たりは………あり過ぎてこ

まいつちんぐ」

などと壊れてなどいられない。信頼関係がけっこう肝心要となってくるオンラインゲームでこれは致命的だ。話がどんどんプレイヤー同士チャットを介してゲーム内に伝播していき、やがては見知らぬ高レベルプレイヤーに変な因縁をつけられた拳句に所持金かつあげとかされるに違いない。さらには伝播する過程であることないことゴシップが追加されて、物事はやがて、自分でも收拾不可能な状況にまで追いやられる可能性だってある。そうなれば最後、他プレイヤーがパーティーメンバーに入れてくれなくなるかもしれないじゃないか。

……まあ、多少行き過ぎな、誇張しているところがあるかもしれないけど、これに似た現象が起きるだろうことは十分に考えられる。……っていうか、すでになっている感がある。

これはどうにかプレイヤーさんに心変わりをしてもらわないと、素敵なオンラインゲームライフを楽しめなくなってしまう。

ゲームとはすなわち、楽しむもの。ストレスを得てしまったては意味がないのだ。

しかし残念なことに、僕の声がプレイヤーさんに届くことはない。情けないと言わないでよ。所詮はいちアバターってことさ。

……と、そのとき、目測50メートルほど先に、モンスターが姿を現した。

体躯は2メートルほど。目が血のように鮮やかな紅に染まり、全身が漆黒の毛に覆われ、それとは正反対の鋭さをもった白に煌めく牙をむき出しているのは、ウルフだった。

ウルフは初めからこちらを凝視しており、総毛を立たし、牙をむき出して威嚇している。グルルル……と、唸り声も喉奥から発せられていた。とてもじゃないが、逃げることができる状態じゃない。背を向けた瞬間に、背後から飛びかかって来そうな気配を、眼前の敵は醸し出していた。そうなれば最後、一撃ノックアウトの後、所持金を半分に減らされた拳句、村まで強制ワープをさせられること

グチャッ。(何かが噛みつかれる音)

ブシューウウウウウ——……(何かが嘔き出す音)

グロいので描写は割愛させていただきます。

まあ、なんだろう。最近……といってもまだ始まったばかりなんだけど……こういうのがもうお約束って感じになってるよね。

薄れ行く意識の中、僕はそんな確然たる想いをもった。

第9話 盗賊ではありません。一応、勇者です

その後、僕が再び操作開始されたのは五分後だった。

心なし液晶画面越しに、ポリポリパリパリとなにやらプレイヤーさんが貪っているBGMが聞こえてきているような気がした。……うん、幻聴だ。これは幻聴なんだ。さっきの戦闘は決して、プレイヤーさんがポテチが食べたいばかりに席を外して、その間にガメ・オベラになったわけじゃないんだ。

ポリポリポリ……

畜生！ 僕がバイ。ハザードで頭を撃ち抜かれたゾンビのごとく、赤い液体を迸らせながら昇天したっていうのに、呑気にポテチなんぞ喰いやがって！

………はっ、違った。単に僕の眼前、目測10メートルほど先にいるアバターが尻を掻いている音だった。ポリポリと。

………。

……いや、僕は別にプレイヤーさんのことを信じていたよ。決して前述したようなことを思っていたわけじゃないからね。そのところ、誤解の無いように願いたい。

ちよつとなにさ。その疑心暗鬼な眼差しは。ほ、本当だよ！ 本当なんだってば！

まったく……。最近の若者はすぐに人を疑うのがよくないよ。そんな変に肩肘張った生き方して、疲れないの？ って言いたいね、僕は。タコやイカのようにフニャフニャとまったく全身の力を抜いたらいいのに……。

と、そのとき、僕の視界にあるものが映った。

二対一の構図になっている。二人のほうは、一方はゴリラじゃないのかと思うくらいに図体がかく筋肉質で、もうひとりのほうはヒヨロリと細く痩せたアバターだ。

そしてそんな二人と対峙するのは、眼鏡を掛けた至って標準体型のアバターだ。

邪威暗くおうおう、のび太郎。いいアイテムもってんじゃないかよ。

脛尾くオレたちにちよつと貸してくれよ。

のび太郎く嫌だ嫌だ嫌だ！ これはボクがほしいものを我慢して買った『ロングソード』なんだい！

どうやらあの二人——邪威暗と脛尾——は、あのひとりのアバターの武器を奪おうとしているようだ。しかも『ロングソード』とは……。低レベルの時には非常に重宝する武器じゃないか。リーチがそこそこ長く、攻撃力もある。しかし、値段が恐ろしくくらいに高い。一度道具屋にいったときに値段を見たのだが、たしか1000はあったはずだ。ちなみに僕の現在の所持金は10であるところから、到底手が届く代物じゃない。

邪威暗くつべこべ言わずによこせや、ゴルアア！ てめえのアカウントハッキングするぞ！

脛尾くそうだそうだ！ ボクの家は金持ちだから、運営の人たちに頼んでお前のアカウントを調べてもらうことだってできるんだぞ！ のび太郎くそ、そんなあ……。

さらりと犯罪めいたこと言ってるし！……っていうか、金持ちなら課金して自分で武器を買いなよ！

……いや、そんなことよりもあの二人、プレイヤーの風上にも置けないやつらだ。人のものを脅迫して奪おうとするなんて……。プレイヤーの性格がどれだけ腐敗しているか、容易に想像できるな。ああいうプレイヤーはきつと、現実世界では陰でこそそと他人の陰口を叩いてばっかりのやつに違いない。それをしてもなお、消化し切れなかったストレスを、このオンラインゲームで、ああいう形で発散しているんだろう。

確かにゲームは、ストレスを発散させたり、ちょっとした息抜きにするものだ。だけどそれはあくまで、ルールを守った上でのことであり、それを破るような人間はゲームをする資格はないと言っているだろう。言ってしまうえば、相手の顔が見えない、または見られないからということで暴言を平然と羅列させたり、自分が上手に出て他プレイヤーを脅したりするような人間は最低だ。現実世界でもろくに規則を守れていないに違いない。

オンラインゲームは確かにゲームだけど、自分だけじゃなく他のプレイヤーも一緒にやっている以上、ちゃんとルールは守らないといけないはずだ。そうじゃないと、規則を破っている人は面白がっているかもしれないけど、傍目からしてみると非常に不快になる。したがって、あの二人の暴挙をみすみすと見逃すわけにはいかない！

……誰だい？ 『お前のプレイヤーも人のこと言えないだろう』ってツツコミを入れた人は。

生憎だけどその言葉……否定できないのが辛いねえ……。

だけどほら！ 見てよ！ プレイヤーさんはあの二人とひとりの間に割り込もうと僕に歩を進ませ始めたよ！ これはきっとプレイヤーさんが正義の心を刺激されて、あの二人の行いを即刻やめさせようと決めたに違いない！

そうさ。仮にも僕のプレイヤーさんは勇者側を選んだ身。きっと今までの演技で、これから勇者としての善行を積んで行こうというつもりに違いない！

やがて僕を二人の間に入りこませ、そこで停止する。

邪威暗くおうおう！ なんだお前！ なんか文句あるってーのか！
脛尾く生意気なことほざくようなら、お前の身ぐるみも剥いでやるぞ！

くッ……。さすがはマナーを守れない類人猿どもだ。言葉遣いもまるでなっていない。チンパンジーに人語を教えているほうがよっぽど時間の使い方が建設的に思える。

だけど、今は正義に目覚めたプレイヤーさんがいる！ 建設的でない時間の使い方をしてでも、お前たちに説教という名のありがたい御経を唱えてやるんだから、感謝しなよ。

二人のほうへ面と僕を向かせていたプレイヤーさんは、ふと180度ターンして、のび太郎さんへと向いた。

そして僕の右手をすつとのび太郎さんに差し出す。……というよりは、「渡せ」と言っているようだった。

すると、のび太郎さんのプレイヤーはそれを察し、僕に『ロングソード』を差し出してき、僕はそれを受け取る。再び旋回し、二人へと向き直る。

……ちよつとまって。まさかプレイヤーさん、あつさり差し出すつもりなんじゃ……。

チャットウィンドウにのび太郎さんから、「まさか差し出すつもりですか？ 違いますよね？ ね？ ね？」とメッセージが送られてきていた。僕もそうじゃないと信じたい。

しばらく面と対峙する僕と不良二人。邪威暗と脛尾はそんな僕に何らかの畏怖を感じ取ったのか、ジリ……、と一歩退いた。なるほど。口で語ることはせずに、全身から迸るオーラで相手を牽制するという考えか、プレイヤーさんは。なかなかカッコいいことをするじゃないか。

邪威暗「く、なんだ……。やるってえのか？」

脛尾「くへ、へん！ お前なんて怖くないんだからな！」

ふふふ……。完全に負け犬、もしくは三流以前の下っ端の台詞だな。怖くないって言っている時点で恐れていることが百も承知になっ
てしまっていることを、この人たちは知らないのだろうか。

さあ、プレイヤーさん。ここでガツンと一言言っ
てやりましょう。こいつらに反省させるための、制裁の言霊を！

するとプレイヤーさんは僕を動かした。

右向け右をすると、僕を一目散にダッシュさせたのだ。

……。え？ ちょっとまって。これって……。強奪なんじゃ

？

。。。。。。。

ええええええええええ——！！

ちょっと待ってよ、プレイヤーさん！ 正義は？ 善行の志は？

どこにいつちゃったのさ！　ちよつとみなさん！　敵前逃亡では飽き足らず、他人の武器を盗みやがったよ？　こいつは！

僕が後ろを振り返ると、そこには鬼のような形相をして追いかけてくる邪威暗と脛尾がいた。のび太郎さんはいないところからすると、突然の強奪劇に思考が追い付かず、呆然と佇んでいるところか……。

っていうかプレイヤーさん、いったい何やってるのさ！　事態をより悪化させるような真似をして！　トラブルメーカーなんてレベルじゃねーぞ！

とにかくまずい！　万が一にもあの二人に捕まるようなことにもなったら、フルボッコ……には同じ勇者勢だからできないにしても、手痛い制裁が待っているに違いない。プレイヤーさんを改心させるためにはそれがいいのかもしれないけど、僕は無実なんだから痛い目に遭うのは勘弁だ。

逃げることしばらく、30メートル程先に入ひとり隠れられるくらい大きさがある茂みを見つけた。プレイヤーさんは一直線に僕をそこに向かわせる。隠れるつもりなんだろうけど、後ろからは距離を離すことなく、かといって縮めることなく一定を維持しながら二人が迫ってきているのだから無駄だと思うよ。

そんな僕の心の声に耳を貸すことは当然なく、僕はプレイヤーさんの意思の赴くまま、茂みに隠れた。

茂みからこつそり顔を覗かせると、憤怒の形相で迫り来る二人の姿があつた。一直線に茂みへと向かつてきている。やっぱりばれてるよ！

と、そのとき、突然プレイヤーはむくりと茂みから僕を立ち上げらせるや否や、僕の前にある茂みを――蹴り飛ばした。

攻撃力300の蹴りは凄まじく、たった一蹴りで茂みは根っこごと二人に吹っ飛んで行った。

いきなりの強襲に、邪威暗と脛尾は回避行動がとれずに真正面から直撃を受け、そのままはるか彼方まで茂みと一緒に飛んで行った。

本来ならダメージを与えられないはずなのに……。このゲーム、
どうやらこんな間接的な方法で味方キャラにダメージを与えること
ができるようだ。

……って、感心してる場合じゃない！ これって一種の抜け道じ
やないか！ こんなもの見つけちゃって、本当に大丈夫なのか？

のび太郎くちよつと待つてくださいよう！

ふと、チャットウィンドウが開き、のび太郎さんのメッセージが
表示された。向こうを見ると、こちらに全力で疾走してくるの
び太郎さんの姿が見て取れる。

なぜ追いかけてきているのか、問われなくてもわかっている。十
中八九、僕のプレイヤーさんが盗んだ武器のことせいだ。

プレイヤーさんは、のび太郎さんの姿を確認するや否や、彼から
背を向け逃走し始めた。

ちよつとおおおおお！ ちゃんと返しなよ！ っていうか返せ
！ ただでさえ悪い僕の評判が一層悪くなるじゃないか！ もうお
婿になれなくなったらどうするんだよ！

僕の叫喚は、虚しく僕の胸中で響くだけにとどまってしまった。

第10話 いざ、新天地へ！

あれから僕は、『ビギナー・ヴィレッジ』から飛び出し、フィールドを旅していた。

多分、もう戻らないであろう。その証拠にプレイヤーさんは、次なる町を目指そうと獣道を突き進んでいる。

僕は確信している。このプレイヤーさんは逃げるつもりなのだと。武器をかつさらったために。

…… っていうか、逃げるのなら初めからそんなことしないでよ！ プレイヤーさん！ 今からでもまだ間に合うよ！ 早くのび太郎さんのところへ引き返して、武器を差し出して、そして言うんだ。ごめんなさい、と。

悪事を働いて、頭を素直に下げることができない人間になりなさいって、親から学ばなかったのかい？ ほら。思い出すんだ！ ボール遊びをしていて、そのボールが近所の窓ガラスに直撃して割れて、親が自分の代わりに謝っていたときの記憶を。あれは悪いことをしたら謝らなければいけないということを、親が身体を張って行動で示し、教えてくれているんだよ！

さあ！ 今こそ、その教えを実行に移す時だ！ なに、恥ずかしがることなんてなにひとつない！ 本当に恥ずかしいのは、悪事を働いても頭を下げず、のうのうとして、あまつさえそれを自慢話にして笑っていることなんだから。

しかし、なんということだ！ プレイヤーさんは僕のそんな声が届いていないらしく、次なる新天地に向かってレッツゴーとばかりに、僕を全速前進させている。

貴様、それでも人間か！ 人として生まれたからには道理をわきまえるのが筋というものだろうに！ お前がやっていることは人間の中でも最底辺の愚者たる行いだぞ！

畜生！ キヤラまで変わっちまってるじゃねーか！ どうしてく

れるんだ！　これで二度目だぞ！

ハッ……！　いかにいかに。ここは一度落ち着かねばなるまいて。

スーハー、スーハー（深呼吸）

……よし。だいぶ落ち着いてきた。

動悸息切れなし。呼吸も安定しているし、血圧も正常血だ。……測ってないから知らないけど。

だがいずれにせよ、プレイヤーさんの非道な行いに、僕の心は荒涼とし、ガラスのハートはズタボロだ。

それと、このプレイヤーさんに付き合ってみておおよそ察してきたのだけど、どうもプレイヤーさんの数多の暴拳は、わざとやっているというより自然体でやっているような気がしてならない。行動前後に一切の躊躇がないのがその理由だ。爆弾の使い方をしらない子供に爆弾をもたせて、それで遊んでいるような……そんな表現がプレイヤーさんの行動にじっくり来る。はつきりいって、危険なここの上ない。

誰か周囲の人間が指摘してあげればプレイヤーさんも自分を見つめ直して、行いを改善するかもしれないけど、如何せん、これまでの暴拳のせいで完全に避けられている……というか、恐れられている感がある。

誰とて、触ると爆発します、とレッテルが貼られているボムに触れることはしないだろう。そんなことをするのは、よっぽどの愚か者か、チャレンジャーか、自殺志願者くらいだ。

そしてそんな胆の据わったプレイヤーが、初心者たちが主に集っている『ビギナー・ヴィレッジ』にいるかと問えば、それは皆無に等しく、多くの人が遠巻きに、まるで腫れ物を見るかのようにするだけだ。プレイヤーさんは知らないかもしれないけど、正直、アバ

ターである僕にはたまらなくそれが辛い。それが英雄を崇め奉る殉教者のごときものだったらまだ優越に浸れているかもしれないけど、残念ながら僕に集められるのは非難ごうごうの、敵を見るかのような視線だ。

あつはつはー。……………嬉しくない。

まあ、そんなこともあったから、あの『ビギナー・ヴィレッジ』からトングズしたのは僕のメンタルにとってはいいことなのかもしれない。これから行くであろう新たな街には、僕のことを知っている人なんていないだろうし。

…………だからと言って、プレイヤーさんの悪行が許されるわけじゃないけど。

そもそも、だ。プレイヤーさんが奇想天外な悪行を積み重ねなければ、逃げる必要なんてなかったし、僕だって変な負い目を感じる必要はなかったわけだ。まったく、無用な気苦労をかけさせないでよ、本当に。

もうやめて！ プレイヤーさん！ アバターのライフはもうゼロよ！ って感じだね。

それでもってプレイヤーさんは、「H A N A S E !」とかいうんだろ？ な、きつと。いやこの場合、「U R U S A I !」が正しいかもしれないな。とっちにしても聞く耳をもたないのは同じだけど。

…………はあ、やめよう。考えれば考えるほど虚しくなるな。

何気なく辺りを見渡す。

どこまでも続きそうな芝生が、時折風に吹かれ身を揺らせ、獣道の両脇に等間隔で植えられている木々の梢が心地よい音を奏でる。

…………ああ。これだけでも僕の心が洗われるような気がするよ。そ

れだけ荒んでいたってことなのかな。……いや、深くは考えないでおこう。

道から逸れたところでは、モンスターがうろつくと徘徊しており、それらを討つことでレベル上げをしているプレイヤーが点々と見られた。僕もレベル上げをしないとイケないんだろっけど、生憎と今、ガメ・オベラになるわけにはいかない。

なぜなら今、ゲームオーバーになってしまうと、一番最後に立ち寄った町（村）に強制ワープさせられるからだ。

そうになると、僕が戻されるころは言うまでもなく『ビギナー・ヴィレッジ』であり、再びあの数多の辛辣な視線を浴び、何とも居づらい空気を存分に堪能しなければならなくなる。

そんなのは嫌だ。

御断りだ。

僕はもう、普通のアバターとして暮らしたいんだ！

ぶっちゃけた話、トラウマになりつつあるんだ！

幸いにも、プレイヤーさんは道から外れた場所に跋扈しているモンスターには目もくれず、黙々と僕を次なる町へと歩ませている。

すれ違う人はいない。それも当然だと思う。初心者たちが集っているだけあって『ビギナー・ヴィレッジ』は、物珍しいアイテムや強力な武器や防具が道具屋に売っておらず、すべてビギナー用の極々初歩的な物品しかないのだ。

村の周りにいる魔物からも、特別珍しい道具がドロップされることもないため、レベルやゲーム操作がある程度上達したら、さつさと新天地を目指す方が、効率がいいのだ。

それに、『ビギナー・ヴィレッジ』周辺の魔物が落とすアイテムはすべて、後の街の道具屋で普通に売られており、それゆえに上級プレイヤーはわざわざ立ち寄る真似はしない。

なにより、『ビギナー・ヴィレッジ』には、自分が一度行った各地の街や村を自由に行き来できる『転送ゲート』がないのだ。これは初心者には上級プレイヤーがちょっかいをかけないようにという、

運営側の配慮なわけだけど、残念ながらその目論見はものの見事に失敗してしまっていると言わざるを得ない。

深夜の『ビギナー・ヴィレッジ』は、魔王勢の上級プレイヤーの溜まり場と化しており、勇者勢の初心者プレイヤーを片っ端から狩っている。それも、僕が目当たりにしたところによると、あの状況はだいぶ前からのものに違いはない。そうじゃないと、あそこまで不文律になっているわけがない。

それもこれも、全部あのハデスとかいうプレイヤーのせいだろう。彼が中心となって、初心者いびりを行っているのだ。自分より明らかに弱い立場の人間とわかっていて相手を痛めつけるなんて……あのアバターを扱っているプレイヤーは性根が腐っているとしか言いようがない。

強者というものは、弱きを助け、強きを挫く心構えをもっているべきだと思う。……って、それを魔王勢の人たちに唱えたところでどうしようもないことなのかもしれないけど、それでも、マナーを守るのは至極当然のことなんじゃないか？ 勇者勢であろうと、魔王勢であろうと。

ゲームは、ルールを守った範囲で楽しむ。それが当たり前と考えている僕は変なのか？

……まあ、ルールを思いつきりぶち破って、悪徳暴拳の限りを無邪気に行っているプレイヤーに操作されている僕が言うのも変な話なんだけどね……。

畜生！ 誰か！ 僕に説得力というものをもたせてくれ！

……っていうか、悪行三昧は僕が悪いんじゃないかってプレイヤーさんが悪いことなんだからね！ そのところ、間違えないでよ！

ちよっと！ そこでどうして疑心暗鬼に目を細めるの？ たしか

に自暴自棄になって無茶苦茶やろうとしていた時期もあったけど、
すべて裏目に出て、最終的に僕が手痛い目に遭っていたじゃないか！
え？ それは結果論だって？

……いや、まあそうかもしれないけどさ……。

……。

……。

でもそんなの関係ねえ！ そんなの関係ねえ！

……。

……。

……はい、すみません。ふざけた上に話を逸らそうとしました。
ついでに言うとか古すぎるよね。どうぞさっきのことは、皆さま
の記憶から削除してください。

そういえば、忘れたい記憶ほど脳裏にこびりついているよね。

……っと、ここで、僕の視線の先にぼんやりと何かが見えてきた。
遠くからは霞んでよくわからなかったが、近づいていくと、だん
だんとその全貌が明らかになってきた。

どうやら、次の街のようだ。

第11話 ジャイアニズムってひどいよね

僕が訪れた街——『アルメダ』は、『ビギナー・ヴィレッジ』と比べるとかなり大きな街だった。

堅牢な壁が街の外周を囲んでおり、出入り口たる門が東西南北にそれぞれひとつずつ用意されている。

白亜のレンガで地面が舗装されており、家は上品な雰囲気漂わせている木造のことが多い。

街の中心には噴水がある広場があり、そこでは商業をやっているプレイヤーたちが、各々のマーケットを開催していた。

広いだけあり、街中はプレイヤーで賑わっていた。いたるところでチャットで会話がなされており、時折、僕のプレイヤーさんのウインドウにも、断片的ながらその会話が表示されてくる。

その多くが他愛ない井戸端会議で、スルーしていい内容がほとんどんだけど、その中にはときたま有益な情報もあったりするので、なかなか馬鹿にすることができない。

さて、新たな街にやってきたということで、『ビギナー・ヴィレッジ』にはなかった施設やシステムが少なからず存在していたりする。

ひとつは、さっきも少しだけ言った商業人のことだ。

この商業人は、NPCではなくプレイヤーがやっており、ギルドと呼ばれる場所で発行している証明書をもっていれば誰でも物を売ることができる。当然、売る事ができるのは、自分の手持ちのアイテムのみだ。

物の値段は完全にプレイヤーに委ねられているので、道具屋で買うよりも安いこともあれば、中には人の足元を見ているような値段をつけるプレイヤーもいる。そういう人は大抵、何にどの比較的高いダンジョン前などでアイテムを売っているケースが多い。

……え？ どうしてそんなこと知っているのかって？

簡単さ。——ゲームキャラクターだからだよ！

だけど、当然のことながらそんなやり方が長続きすることはまずなく、結局のところ、地道に顧客の信頼を得てじわじわと利益を上げる人がほとんどだ。そしてそういう人は概して、道具屋よりも値段が安い上、他の店では取り扱っていない珍しい物を仕入れている場合が多い。

ちなみにこの商業人。どうして『ビギナー・ヴィレッジ』にはなかったのかというと、あそこには初心者が集っているため、物の物価がよくわかっていない初心者プレイヤーたちに、数割増の値段で物を買わせようとする輩がいるかもしれないと、運営者たちが懸念したためである。

……まあ、僕に言わせてみれば、初心者の所持金なんて知れているし、そこから巻き上げられるお金も雀の涙に等しいんだけど……。特に僕のふところ事情は、キングボンビーも裸足で逃げだすくらいに……。いや、逆に同情して他プレイヤーからぶんどった金を恵んでくれるのではないかと思うくらいに貧しい。それもこれも、モンスターとの戦闘で負けまくって、その度に所持金を半分ずつ減らされていった結果だ。嗚呼、悲し過ぎる……。

閑話休題。

さて、もうひとつの新たな施設のことを話すことにしよう。

ギルドだ。

ギルドはというと、様々な依頼を請け負っている施設で、誰でも依頼を受けたいときに受けることができる。

依頼の中には期限が定められているものがあり、それが過ぎると依頼不達成ということになり、所持金マイナスや経験値マイナス、あまりに依頼が達成されていないようなら最悪、依頼受諾を、しばらくの期間禁止させられることもある。そのため、誰でも受けれるからといって、依頼を無下に扱うことはできない。

依頼の内容は様々で、アイテム探しやダンジョン攻略、魔物討伐等がある。

当然、依頼を達成すれば、それに見合う報酬が得られたりするの
で、利用するプレイヤーは初心者から上級者までいる。

プレイヤーさんは今、そのギルドの中へと僕を入らせ、カウンタ
ーでどの依頼を受けようか、と色々模索している。

別に依頼を引き受けるのはいいけど、僕のレベルと相談して決め
てよね、プレイヤーさん。高報酬に目をくらませて、到底達成する
ことが不可能な依頼を引き受けないでよ。

考えることしばらく、膨大にある依頼の中で、プレイヤーさんは
とある依頼に焦点をしばらくつつあった。

依頼内容	ロングソードをひとつ、持ってくること。
報酬	1500メタ

ちなみに、『メタ』というのはアカシャ戦記の通貨単位だ。

正直これは、かなりお得な依頼内容だった。

なにせロングソードひとつ当たりの値段が1000メタほどのた
め、500メタ得することになる。初心者プレイヤーにとって、こ
の500メタは大きい。なにせ初心者プレイヤーは、そのレベルの
低さが相俟って、低級モンスター一匹当たり20〜30ほどしかお
金を稼ぐことができないからだ。

だけど……。

……うん、わかっているんだ。この依頼を引き受けちゃ駄目だっ
て……。

だって……僕の持っているロングソードは、他人のものだし。勝
手に交渉の道具に使うことは赦されないことなんだって。借りパク
は駄目だよ、当然のことながら。……っていうか、借りてすらい
ないわけだけど。強奪したわけだけど……。それはプレイヤーさん
もわかっているはずだ。

だから……だから……。

ポチッ

プレイヤーさんは、何の躊躇もなく、依頼受諾ボタンをクリックした。……あつはは。もう怒る気力も起きないねえ。

するとウィンドウが開かれ、そこには「すでに持ち物の中に、依頼されたものがありますが、それを渡しますか？ はい／いいえ」と書かれていた。

プレイヤーさん、駄目だ！ 欲に目が眩んで道徳感を捨てちゃ駄目だ！ 勇者にあるまじき行動をすることになるよ！ もうすでに勇者とは思えない暴挙の限りを尽くしてしまっているけど、心を入れ替えればそこから新たな人生のスタートを切ることができるんだから。だからプレイヤーさん、やめるんだ！ やめてくれ！ ……いや、やめてください！

ポチッ（『はい』にクリック）

ゴルアアアアアアア！　　なんばしよつとねプレイヤーさん！
人がせつかく低頭を床に擦りつけるかのごとくお願いしたのにふ
いにしやがつてええええええええええ！

せつかく新しい街に来たんだから心機一転しようって気持ちはないの？ プレイヤーさんには！

そんな僕の魂の叫びも虚しく、ファンファーレとともに依頼達成という文字が飾られたウィンドウが表われ、同時にその報酬内容も同時に表示された。

僕のふところは豊かになったけど、心がどんどん空虚になってきている感があるのは僕の気のせいだろうか。……ちなみにこれは、疑問形じゃないので、そのところよろしくお願いしてもらいたい。プレイヤーさんの手によって、早々とギルドを出る僕。

その後、プレイヤーさんは道具屋に入っていた。どうやら依頼でせしめたお金で買い物をするつもりらしい。盗人猛々しいとは、こういうことを言うのだろうか。

やがて、先ほど依頼の品として献上したロングソード（1000メタ）をひとつ購入した。

……あれ？ 1500メタなら、ワンランク上の武器が手に入るのに。

もしかしてプレイヤーさん。のび太郎さんに返すために買ったんじゃないか……。

そうだよな。人のものを盗んでおいてそれを売り払うなんてこと、いくらなんでも僕のプレイヤーでもないよね？

な〜んだ。それじゃ、早いところまだ『ビギナー・ヴィレッジ』にいるであろうのび太郎さんに武器を返しに行こうよ。そうすれば僕とプレイヤーさんの中に蟠っているであろう罪の意識も、払拭できるはずだよ。そして、気分もすっきりさせたところで、魔王勢をこらしめる冒険を開始しようじゃないか！

——そんな僕の淡い期待は、ロングソードを僕に装備させたという形で木端微塵に粉碎された。

………前言撤回。やっぱりこの人は自分のことしか考えてねえ。

第12話 いざ！ ダンジョン探索へ

あれからプレイヤーさんは、残った500メタも体力回復の効果があるポーション等につぎ込み、僕は再びおけらとなった。

ふところが重たかったあのえもいわれぬ余裕感は、たった数分のうちになくなってしまった僕は、若干意気消沈気味だ。せめて少しくらい残しておこうよ、と思う。

僕のプレイヤーさんは、先ほどの依頼達成で味をしめたのか、再びギルドに立ち寄った。

プレイヤーさん。言っておいてあげるけど、世の中そううまくとはかりが続くわけがないんだよ。

むしろ苦難と幸福は一生の間に同じだけ降り注ぐものなんだから、そろそろ貴方も苦行を嫌でも強いられることになると思うよ。……っていうかなれ。こういう世の中なめ腐った青二才は、一度手痛いしっぺ返しを被らないと良い人間になれないんだよ。

プレイヤーさんは前回のようにな、自分が引き受けられる依頼の内容を確認して行く。

基本的に、アバターのレベルに合った難易度の依頼が表示されるのだけど、現在の僕のレベルはあまりにも低すぎるため、低難易度のものでまいぶ骨が折れることだろう。

ぶっちゃけた話、さっきのようなラッキー展開でも起きない限りは。

当然のことながら、先ほど引き受けた『ロングソード引き渡し』の依頼はなくなっている。

時間が経てばまた出てくるんだろうけど、そんなものを待っていないというものだ。

ウィンドウに表示されている依頼は、そのほとんどがモンスター討伐とダンジョン攻略のものであり、はっきりいって今の僕のレベルではなかなか厳しいものがあった。

もちろん、攻略できればそれなりの経験値が手に入り、能力的にもだいぶ向上するのだろっけど……プレイヤーさんの腕からしてそれは天地がひっくり返るくらいありえないことだ。

ロングソードを装備しているとはいえ、攻撃力はもう上げなくていいわけだし、鬼に金棒と言えば響きがいいが、正直なところ、蛇足という他ない。無限大にどれだけ数を足したところで無限大なわけだから……。

どちらかっていうと、防具のほうを充実させてほしかった。

武器も、確かに必要なかもしれないけど、今最も重要視すべきなのは攻撃力ではない。

金魚掬いに使用されるあの紙よりも薄い防御力。

スぺ。ンカー並に打たれ弱い体力。

この二つをどうにかしない以上は、まともな戦いなんてできないに等しい。

実際、これまでの戦いが、一撃でやるかやられるかのものだったことから容易に察することができる。

ここは一度、『ビギナー・ヴィレッジ』まで引き返してレベル上げに専念するべきなんじゃないだろうか。

低レベルでゲーム攻略なんていう縛りプレイをしているわけじゃないだろうし。……いや、そもそも、クリアのないオンラインゲームで縛りプレイは自分の首を絞めるようなものじゃないか？ ……いや、もともと制限プレイというのはそういうものか。

しかしそういうものは玄人のやることで、初心者プレイヤーが行うようなものじゃない。

しばらくすると、プレイヤーさんはある依頼に目をつけたようで、それを受諾した。

その依頼内容は、

依頼内容 町の東にあるダンジョンを、3階まで攻略すること

受諾と同時に、そのダンジョンに入ることが許される証明書が引き渡される。

ダンジョン攻略……。

今のプレイヤーさんには荷が重い依頼と言える。

依頼の期限が定められていないのが唯一の救いというべきか。万全を期してからダンジョン攻略に臨める。

そうと決まったらプレイヤーさん。この依頼を最初の目標にして、早くレベルUPをしよう！

この依頼を攻略できるくらいになれば、プレイヤーさんはおおむね成長したと言ってもいいだろうから……さあ！

プレイヤーさんは僕の想いが通じたのか、ギルドを出るとフィールドへと飛び出した。

そしてそのまま東へ、東へ……………。

……え？ いや、ちよつと待って。

まさかとは思っけど、早速ダンジョンに赴くつもりじゃないだろうね？

はつきり言って、今行っただころでダンジョン内に蔓延っているザコ敵に袋叩きにされてTHE ENDというのがオチだよ？

僕はもうこりごりだぞ、いい加減。理不尽が感じられるそんなガメ・オベラは。

しかし悲しいかな。僕の予想は、どうやら悪いベクトルに働いてしまっているようだ。モンスターとの遭遇を、巧みに回避しながら向かう先には、まぎれもなくダンジョンがある方角だ。マップにもちゃんと表示されている。

嗚呼！ もういつそのこと、アバターが受けたダメージをプレイヤーも味わうようなゲームシステムをつくってくれないだろうか！フル。ンクロしたりとか、S.O.のようにゲーム内での『死』は

現実での『死』に直結しているとか……。そういうハードなペナルティをつけないとこのプレイヤーさんは学習しないよ！絶対！痛い目に遭って成長するのが人間ってやつじゃないの！？

僕の心の叫びは、空しく、胸中だけに響くのであった。

第12話 いざ！ ダンジョン探索へ（後書き）

大学の前期テストが迫ってきていますので、しばらく更新を停止します。

再更新日はおそらく、早くても7月下旬頃になるかと思っています。どうかご了承ください。

あと、更新時間がずれた事、すいませんでした。

第13話 初めてのダンジョン 一層目 逃げ腰は死の香り（相手が）

あゝ。みなさん、こんにちは。

あるいはこんばんは。

もしくはおはようございます。

ご機嫌いかがですか？

うん？ 元気だった？ それはよかったですね。何よりです。

うん？ 普通だった？ うゝん……。ノーコメント。

うん？ 悪いって？ まあそう言わずに、きっと良いことが近い将来起きますよ。

僕？ 僕はね……。

かるゝく、最悪だよ

どのくらい最悪かって言うとな、両手の爪が一枚一枚引っぺがされるくらいに最悪だよ。

……え？ 例えがよくわからない？

大丈夫ですよ。言っている僕だってよく理解していないから。ならどんな例えだったら自分でもわかるかっていうとな、

……はい。すいません。ちょっとした自己逃避ってやつをしていました。

現在、僕は『アルメダ』より東の方角に位置しているダンジョンへと、足を踏み入れていた。

洞窟のダンジョンで、薄暗い闇を、側壁に設置されているトーチが淡く道筋を照らす。ところどころカビや苔が生えており、湿気もムンムンだ。

まったく……。こんなムンムンじゃないよ。できれば囚われのお姫様の色気にムンムンしたいものだ。それに、プレイヤーさんはわからないだろうけど、さっきからコケに足を取られて危うく滑りそうになっているんだけど。滑りそうになるのを必死にこらえているから足の筋肉が必要以上に突っ張ってしまつてすごく辛い。サロ。パスをログアウト中に運営側に求める必要がある。THE ヒラメ貼り。

ちなみに言っておくと、ここに限らずダンジョンはすべて自動生成ダンジョンだ。何百、何千とあるダンジョンデータから階層ごとにランダムで決定されていき、それを攻略していくのだ。

そしてダンジョンは、いつでも自由に入れるわけじゃない。ギルドからのダンジョン探索依頼を受け持つておくか、あるいはダンジョンを自由に探索できるようになるチケットなるものを購入しなければならぬのだ。なお、後者の場合はダンジョンの階層に制限がないため、どこまで深層に到達できるか、といったやり込みプレイが可能である。

それはともあれ。

プレイヤーさんの操作に従つて黙々と先を進むと、ややひらけた空間に到着した。

半円状の空間で天井が高く、燭台が広間を囲むように配置されている。広間が東西南北に道にわかれているところから察するに、どうやらここは分岐地点のようだ。僕がこの部屋に入ってきたのは東の方面であるため、実質、わかれ道は三つあることになる。

……と、その広間のちょうど中心に、宝箱が鎮座していた。ダンジョンには欠かせない、攻略のほかにはこれが醍醐味だと言っても過言ではないものだ。

プレイヤーさんも気づいたらしく、僕をその宝箱まで接近させる。

だけど……、僕にはどうも嫌な予感しかしていなかった。

宝箱がこうも簡単に目に着く場所に設置されているのだろうか。もつとなんかこう……部屋の隅にポツンと体育座りしているかのように配置されているものじゃないのか？

宝箱まで近づくと、部屋の中が暗くて気づかなかった細部まではつきりと見る事ができた。

古めかしい、木でできたその宝箱の正面には、錆びた鍵穴と、ドクロマーク。

……………あれ？

なんだろう？　今さっき奇妙なものが僕の視界に入ったような……。

いや、今でもなんか不吉でやたらとリアルに描かれたマークが僕の視野に収まっている。

僕の両手は、プレイヤーさんの操作によって宝箱に手をかけられようとする。

……って、ちょっと待って！

プレイヤーさん！　この宝箱に描かれているおぞましいマークが目に入っていないの？

明らかに罠！　「自分に触るとなにか恐ろしいことが起きますよ」って、ヤドクガエルみたいに見た目で強調しているじゃないか！　貴方は「この食材には毒が盛られていますよ」とあらかじめ宣告されているというのにそれを皿まで喰らう人間ですか？

僕の手は、自分の意志とは無関係に宝箱の両端にかかり、それを勢い任せに上へと押し上げた。

直後、広間に響き渡るサイレン。

同時に、室内のいたるところに魔法陣が展開され、そこからモン

スターがわらわらと出現してきた。

Oh！ なんとというベタな展開！ 宝を手に入れようとしてそれが罠でしただなんて、イン。イ・ジョー。ズにとてもじゃないけど顔合わせできないよ！ 顔合わせする予定もないけど。

おまけに通路はことごとく強固な扉で閉じられ、モンスターの巢窟に僕はただひとり取り残されてしまった。

スライムが五体。ゴブリンが三体と計八体。自分を包囲するように布陣が展開されている。

四面楚歌の図とは、まさに今の僕の状況を言っただろうね、きつと。

今からでも遅くはない。フラグを立てなければ！ えーっと……えーっと……。

……僕、このダンジョンクリアしたらログアウトするんだ……。

……あれ？ なんだろう。この勝っても負けても死亡フラグ感が漂う台詞は。

いかん！ 自分でいうのもなんだけど、負け癖がついてしまっている！

だけど、それを抜いたとしても絶望的なことに変わりはない。スライム一匹にだって勝てるかどうか怪しいというのに、それプラスアルファの敵勢に勝てるわけないでしょ。これはまた「ああああ」は視界が真っ暗になった「フラグかもしれない。……いや、絶対にそうだ！ 自信をもって言いたくないけど、絶対にそうなるに違いない！ スライムの体当たり攻撃で世界的に有名な配管工の姿をした僕は、スペ。ンカーのごとく儂く散ってしまうんだ！

かろうじて今までと違う点と言えば、ロングソードを装備しているということだけ。攻撃力こそ伸びてはいるが、ほかの能力値は紙

レベルだ。風前の灯火、砂の上にできた城、穴に落ちそうになって二段ジャンプをマ。オにかまされそうになっているでっていうも同然だ。

……いやだ。僕はまだ……負けたくない！

とかなんとか考えているうちに、ゴブリンが棍棒を振り上げてこっちに向かってきているし！ それに煽動されるようにほかのモンスターも僕に照準を合わせてきた。

うひひひひひ！ 勘弁してくれ！

棍棒の一撃が横一文字の軌道で僕に迫ってきた——そのときだ。

紙一重のところでプレイヤーさんが僕を操作し、攻撃から回避することに成功した。

攻撃を避けられたゴブリンは、さらに追撃を入れてくる上に、周囲のスライムも自身の身を鉄砲の弾のように飛ばしてくるが、それもひよいひよいと回避していく。

どうやらプレイヤーさん。今までさんざんやられたためか、逃げる能力だけはとてつもなく上達しているみたいだ。この技術、もつと別のほうへと向けてくれれば、僕もこんな苦勞をせずに済んでいるはずだろうに、今更そんな過ぎた事を言ってもどうしようもないことだ。

おまけに攻撃を避けているうちに、敵の攻撃が勢い余ってほかのモンスターへと直撃したりしていた。

実はこのゲーム、攻撃の判定が敵味方を問わないため、こういうことが起きることがあるのだ。

このプレイヤーさんが、まさかそんなことを知っていると到底思えないから、すべては偶然……まぐれの産物ではあるけど、ともあれ助かった。プレイヤーさん、こういった土壇場の運はけっこう高いのかもしれないな。実力でないのが残念でたまらないものの、「運も実力のうち」って言葉もあるくらいだし、ここは存分にプレイヤーさんの運に乗っかることにしよう。

スライムの肉片飛ばしが、僕を棍棒で殴ろうと猛然と迫り来るゴブリンにヒットし、体力バーが減る。さらに、ゴブリンの攻撃をひらりと舞い落ちる木の葉のごとき回避をすると、その先にいたスライムに棍棒がめり込む。中には、モンスター同士が仲間割れを開始しているところまであり、広間は実に喧騒としていた。

プレイヤーさんは体力が著しく低く、かつこちらに注意がいていないモンスターを見つけるや否や、僕にロングソードを構えさせて、背後から斬りつける。

……っというか、汚い！ 汚すぎるぞ戦略が！ 勇者とはとても思えない戦い方だ！

普通、勇者ってやつはどんなにこちらが不利であろうとも真正面から敵に突撃するものじゃないのか？

畜生！ 僕の勇者魂を返せ！

僕の意志とは反対に、身体は卑怯な手段を駆使して敵を駆逐していつていた。

なけなしのHPが残っているスライムに向かって、問答無用に剣で一刀両断。攻撃力が半端でないほどに強いため、まるで爆弾が体内で爆発したみたいにスライムの肉片が四方八方に四散する。SEもそれに見合うほどに派手な音だ。

ゴブリンを倒すときも同様で、背後からこそそと忍び寄り、その頭をスイカのごとく……駄目だ！ これ以上は十八禁プラッターゲームになりかねないので僕の口からは説明できない。この壮絶さは、ハ○ター×ハ○ターで人が殺されるときに画に匹敵している。

……っというかグラフィッカー！ なんでこんなところに必要以上の労力を割いてこんなグロイ死に様をプレイヤーの方々に見せようとしているんだよ！ バ○オハザードのようなゾンビゲームじゃあるまいし、「俺たちこんなにすごいグラフィック作れるんだZE」ってことか？ まったく、子供が見てるでしょーが！

広間で繰り広げられる卑怯で陰惨な殺戮ショーは、モンスターが

すべて消滅するまで繰り返されることになった。
勇者というより、本当に魔王だよ。このプレイヤーさんは。

第13話 初めてのダンジョン 一層目〱逃げ腰は死の香り（相手が）〱（後書

お久しぶりです、なかたください。

前期テストが終了いたしましたので、これから更新していきたい
と思います。

かつてないほどの激戦の土地となった場所がある。

四方八方に飛び散る、何の動物かわからない肉片、爪、臓腑……。地面は暗くてもわかるくらいに鮮明な赤で染められており、それが低地に向かって川のようになっていた。

その低地の先には宝箱があり、人々はこの凄惨な光景を生み出した元凶であるこの宝箱のことを、決して開けてはならない災厄の箱——「パンドラの箱」と呼び、決して触れぬように、人々の中で語り継がれることになった。

……つと、こんな感じでよろしいですかね？ 前回のあらすじはなお一部、事実とは異なっているところがありますが、ご了承ください。

え？ 間違いだらけだって？ 幻覚を見ているのですよ。

僕は今、ダンジョンの一層を攻略し、二層目を探索していた。

画面越しのプレイヤーさんにはわからないだろうけど、湿気が一層むんむんと増し、できることなら上半身裸で探索したい気分になっていた。

……いや、しませんけどね。勇者的に……。そしてアバターのなにか大切なものが奪われるような気がしますから。

こらそこ！ 「もうそんなこと気にしても無意味だろうが」って思ったでしょ！

僕は決して屈しないとも！ プレイヤーさんの数々の謀略に、身体はいくら乗っ取られようとも心までは絶対に！ がんばれ僕！ 希望はそこにあるものさ！ 「そこってどこなのさ」ってツツコミ

は決して受理しない方向で行くので、ご了承願いたい。

薄暗い上にでこばこで足元が不安定な道を、僕は足に必要以上に力を入れて踏ん張りながら黙々と前に進む。

モンスターは今のところ出てくる気配はなかった。……まあ、こんな狭い通路で出てきてもらった日にはガメ・オベラものだが。

ふと目測二十メートルくらいのところに、少し側面がふつくと広がった場所が見つかった。今まで変わり映えない風景が続いていたため、余計に目についた。

さらにプレイヤーさんの操作でそこに接近してみると、なにかがいることが確認できた。

他プレイヤーではないことは確かだ。なにせダンジョンに複数人入るためにはパーティを組まなければならず、プレイヤーさんは誰ともそれを行っていないからだ。

……ということは、考えられるのはひとつ。

すなわち、モンスター！。

僕は身を引き締め、じつと眼前にいるものを見据える。

薄暗くてよく見えなかったそれは、僕が前へ前へと進むと徐々にその姿を現し始めた。

それは、壺だった。

僕の胸部ほどまで高さがある少々古ぼけた緑色の壺。入口部分にはコルクのようなものがつまれており、いかにも「中に何か入っていますよ」的な雰囲気醸し出していた。

プレイヤーさんは案の定、その壺をポインターでクリックして調べた。

???>助けてください。私はモンスターに閉じ込められた可哀想な妖精です。

調べて出てきたのはメッセージウィンドウだった。壺の中からそんなくもりながらも可愛い声聞こえてくる。

妖精だって？ 妖精っていえば緑衣に身を纏って手の甲にデルタの文様が刻まれた主人公が瀕死状態になったときハートを十ほど復活させて助けてくれるあれか？

???>お願いです。助けてください。助けてくださればお礼をさせていただきます。

……いや、待てよ。もしかしたらこれは罠かもしれない。

だって第一層の宝箱の件もあるし、どうにも変に勘ぐってしまう。もしこの壺を破壊したために魔術師が現れて、呪いでカエルに変えられたりしたらどうしよう。勇者の面目丸つぶれだよ。

プレイヤーさんは迷っているのか、僕と壺を対面させてじつと硬直させたままだ。やっぱりプレイヤーさんも僕と同じ考えにいきついてしまっているのだろうか……。それとも単に、会話イベントに突入したから休憩のチャンスだと思って、スナック菓子でもポリポリ貪っているのだろうか。

ちなみに、スナック菓子を食べた手でゲームのコントローラーを触ると、友達とかに嫌な顔をされることうけあいなので、必ずその際は手をふきましょう。「ベタベタの手でコントローラー触んなや！」みたいな。By課長。

ウィンドウには「助けますか？ はい/いいえ」と選択肢が表示されており、プレイヤーさんの操るカーソルは「はい」のところでクリックされた。

その実効コマンドによって、僕は妖精が閉じ込められている壺を、手に持っていたロングソードで両断する。

中にいる妖精、大丈夫だろうか？ ……っていうか、別に割らな

くともコルク栓を抜くだけでよかつたんじゃ……。モンスター相手に存分に力を振るえないからこそとばかりに行使しているのだろうか。

すると唐突に、割れた壺が激しい閃光を放った。

薄暗かった洞窟を一瞬で明るくさせたかと思うと、それも数秒。

すぐに光は小さくなり、やがてそれは羽根が生えた小さな人の形をかたどり始める。

これはもしかして……妖精か？

やがて光が止み、その中から何かが姿を現した。

頭には佻しく一本だけ頭髮がアホ毛のように波立っており、立派な白の口髭をたくわえ、上半身裸、下半身は海パン一丁のみという世にも奇妙な妖精だった。妖精だからってこれは「妖しい」ってレベルを超えているぞ！

これは……ただの妖精のコスプレをした変態おやじだ！

???>いや、助かったぞよ。さすが勇者殿ぞよ。余の困り果てていたところによくぞ来て封印を解いて下さった。

……なんだろう。僕は今、とんでもないものを封印から解き放ってしまったのかもしれない。

できることなら壺を復元して目の前の妖精もどきを再度封印してやりたい。

???>おおっ！　そういえば余の名前をまだ名乗っていなかったぞよ。余はツン・パーシ。ありとあらゆるRPGで数々の主人公を助けている由緒正しき妖精のひとりぞよ。

妖、精だと……？ モンスターの間違いじゃないのか？
それとツン・パーシって逆から読むと………いや、もう何も言うまい。

海パン一丁の妖精——ツン・パーシは、「ファッファッファ……」とエク。デスに謝れと言いたくなるような高笑いをした後、

ツン・パーシ>では、約束通りお礼をさせていただくぞよ。ずばり、余を助けた報酬は……。

ここで、「ダラダラダラダラ~~~~~」と無駄な音楽がどこからともなく流れてくる。

そして、「ジャーン！」と曲が鳴り終わったと同時に、ツン・パーシのメッセージがウィンドウに表示される。

ツン・パーシ>わ・た・し（はあと）

……い、いかん！ アバターだというのに無性に吐き気を催してきた！

っていうか、ウインクとおかま声をやめてくれ！ ……いやそれより、ゲーム開発者はなにを考えているんだ！ もっと可愛い妖精を用意しててよ！

これはもしかしてあれか？ 今まで、僕が（正確にはプレイヤーさんが）ものすごい横行を繰り返してきたから、こんな妖怪が登場してきてしまったのか？ 今までの罰のしわ寄せがここに収束しているのか？ そうなのか！？

僕は落胆したかった。きつと僕が自由に行動できる立場だったら、今頃肩が身体から外れて地面にボトリと落ちてしまっていることだろう。

ツン・パーシ>これからは、余が勇者殿の行動を誠心誠意サポートさせていただくから、勇者殿は安心して冒険してくだされでぞよ。

ええええええええええ——！！「報酬はわ・た・し（はあと）」って冗談じゃなかったの！？ 本気だったのか！

勘弁してくれたまえ！ ガイド役なんてものオンラインゲームに必要だよ！ プレイヤーひとりひとりのペースで適当にプレイするのがMMOなんだから、ガイド役なんてものがいたら面白さが半減しちゃうじゃないか！

しかし、僕個人がそんな慟哭をしようとも、ゲームシステムには逆らえない。「ツン・パーシが仲間になった！」とファンファールとともにメッセージウインドウが表示され、アイテムの貴重欄のところにスッポリと入ってしまった。

……っていうか、アイテム扱いなんだ。

もしかして、プレイヤーさん以外のプレイヤーの人も、妖精なるものを持っているのだろうか？ 今まで見かけたことがないけど、もしかして使う必要がないからずっと道具の中にしまいこんでいるのだろうか。

……まあ、このゲームはオンラインだし、いちいちガイドに行動を指示されちゃかなわないか。自由がメリットのひとつであるわけだからな、MMOは。

多分、プレイヤーさんも使わないだろう。この人はやりたい放題、気の赴くままにプレイしているし、今までの行いからおおよそそのように推測できる。

おそらく、あの妖精は道具袋の片隅に追いやられ、「どれ、ちょっと荷物整理でもしようかね」というときになって、冷蔵庫の奥に詰め込まれていた食材の如き哀れな姿となって発見される運命になるのだろつ。そう考えると、同情の念も多少なりとも感じざるをえない。

だけど……許してくれ。僕は、プレイヤーさんの数々の横暴で心身ともにグロッキーとなっているから、自分を支えるだけで精一杯なんだ。とても他人を支える余裕がない。こんな狭量な心である僕を許してくれ。

僕の心の叫びは、誰一人ともすれ違わない薄暗い洞窟に木霊することなく、胸中のみで響くのだった。

プレイヤーさんは、何事もなかったかのように、ダンジョンを奥へと奥へと進み行く……。

どうも、二週間ぶりの更新となります、なかたくです。

夏休みですね。皆さんは、夏休みの宿題をもう終わらせたのでしょうか？

僕は大学生のため宿題こそないのですが、後期の授業に置いてけぼりを喰らわないように、今から勉強しているところです。

大学って、もっとフリーダムなところってイメージがあったのに…… おかしい。理学系だからか？

閑話休題。

ここで少しお知らせがあります。

この「ああああ」の第一話の後書きに書いているのですが、これが連載される前に、「魔術師」という小説が連載されていて、現在は消しています。

理由はまあ個人的なもので、言ってしまうと書き直し作業をしていたわけです。

ですが、その作業も終了しましたので、長らく休載していた「魔術師」を、8月17日、月曜日、午後8時より連載再開したいと思います。

だいたい1か月ほど終わるだろうとたかをくくっていたら、気づけば夏になってしまっていました。

書き直しをしたことによって、一部のキャラやその性格、また設定などが変更または削除されていて、実際「魔術師」というよりは別作品状態になりました。（実際、タイトルも変更する予定です）

また、この「ああああ」の処遇に関してなのですが……。

もともと、この小説は「魔術師」が休載している間の繋ぎとして連載させたもので、連載再開の準備が整い次第、消すつもりだったのですが……連載をこのまま続けたいと思います。

実際、僕としてもずっと「魔術師」一本で書き続けるのはだれて

しまつし、その逆もしかりです。

ですので、更新ペースが若干落ちますが、これからも宜しく願います。

また、よろしければ、8月17日より連載する生まれ変わった「魔術師」も読んでください。そのときは作者、感激してキ。キ。踊りを乱舞していることでしょう。そのときは近所に腰蓑をつけた変態が出没するかもしれませんが、生暖かい目で見守ってやってください。（笑）

……いえ、しませんよ？ 一応、念のために断っておきますが。

……な、なんですか！？ その目は！ そんな眼差しを送られても僕は腰蓑を装着してピッヒヤラしませんからね！

……と、馬鹿な話はこの辺で。

長々と後書きに付き合ってくださいって、ありがとうございます。
では。

第15話 初めてのダンジョン 三層目く汚いな。さすが勇者汚い

第二層でおそらく一生役に立たないであろう仲間を手に入れた僕とプレイヤーさんは、現在第三層目に突入していた。

今までのマップは、自分の言ったことのないところは黒く塗りつぶされていてわからなかったのだけど、三層目はすでにマッピングが完了した状態だった。

それに目を通すと、大きなフロアがひとつあるだけで、そこまでの道筋は一直線だ。そのため、道に迷うことなくプレイヤーさんは黙々と僕をそこまで直進させる。

モンスターの類はいない。ちなみに第二層では、運命の仲間との出会いの後、ちよくちよく出てきていたのだが、プレイヤーさんが逃げの一手でまったく戦わず、見せ場がゼロだったためカットさせてもらった。なに、ちよつとした編集ですよ。少しでも僕を格好良く見せるためのね。

しばらくすると、マップに表示されていた広間だろうと思われる部屋まで辿り着いた。

中は暗く、一寸先は闇状態だ。

その中に、不気味に光る紅い光芒がふたつ、爛々と僕を見下ろしていた。

……ちよつと。明らかに何かいるんですけど！

思った直後、広間にゆつくりと白光が照らされ始めた。

それに伴い、二つの紅い光の正体が、はつきりとその姿を現した。それは、巨大なカマキリのモンスター。鋭利な切れ味を持ったカマが鈍色に光り、カマキリの目は紅く煌々と僕を見下ろしている。

ふつくらとした腹部は脈打つように動き、口をカサカサと開閉している。

昆虫好きなら歓喜の声を上げ、昆虫嫌いならトラウマになりかねない風貌をしたカマキリモンスターの名は、シザーマンティス。

モンスターの頭上に緑色のHPバーが表示されており、その上にモンスターの名前が書かれていた。

モンスターの姿が鮮明になると同時、フロアの入口は堅く閉ざされ、逃げ口なるものは一切存在しなくなってしまった。敵はシザーマンティス一体だけなので、完全なタイマン勝負なのだが……。

シザーマンティスの複眼が僕をじっと見降ろし、ギラギラと凶悪な光を帯びている。それだけで僕は思わず背筋に毛虫が這ったような悪寒を感じてしまった。

イカンイカン！ 僕は仮にも勇者なんだぞ！ 他プレイヤーの獲物を横取りしたり、アイテムを強奪したりしていても、一応勇者なんだ！

こんなところで委縮してしまっていては駄目だ！ 後に待っているであろう敵との決戦のとき、前線で活躍できないじゃないか！

キシヤアアアアア——！！

ひひひひひひひひ！！

真っ赤に染まった口腔が僕に迫ってきた！

ああ！ いかん！ 気の早い僕の脳味噌が危険を察知して僕に走馬灯を見せようとしている！ 次から次へと流れてくるこれまでの人生が、浮かんでは消え浮かんでは消えを繰り返し、「さあ、後は逝くだけだ。遠慮なく御逝き」と頭の芯が指示を出している。

嫌だ！ 負け犬思考の自分の意志に従いたくない！ 従いたくないけどこのままじゃ腰ぬけ腑抜けの敗北思考の前に跪くことになってしまう！

迫り来る巨大カマキリの口が、天国への入口ないしは地獄への入口に見えかけたとき、プレイヤーさんの操作によって後方に下がった。

シザーマンティスは勢いづいていたこともあり、そのまま床に激突し、地面を揺るがした。そのせいか、モンスターの体力バーが微微たるものだが減少した。

この隙に攻撃を——とプレイヤーさんは思ったのだろう。ロングソードを僕に構えさせ、真っ直ぐにシザーマンティス目掛けて剣を振るわせた。

しかし、すばやく巨太カマキリは体勢を立て直したため、僕の一撃は虚空を斬った。

あ……まずい……。

ボスの鎌が大きく振り上げられた。ギリリと鈍色に光る刃に、技硬直で動けない僕の姿を映していた。

振り上げられた鎌が振り下ろされ、僕の体力がゼロになろうとしたとき、プレイヤーさんは技硬直が解けた直後に僕を右へと移動させることによって、紙一重で回避した。

ふう……。危ない危ない。なんというかプレイヤーさん、なんだかんだでいい動きをしているんじゃないか？ 専らそれが逃げ専門というのが勇者然としていないけどこの際どうでもいい。命あつての物種だ。

再度攻撃を外した巨太カマキリは、忌々しげに僕を睨みつける。もし知恵というものをボスが持っていたら「おのれ……黒い紳士みたくちょこまかと動きやがって……」とでも言われていることだろう。

勇者とGと一緒にするな！ と文句のひとつでも言っただけでやめたかったが、生憎とそれは否定できそうになかった。

なにせ、それからの戦闘はというと、僕はボスの部屋をただひたすらに逃げ回り、ボスの攻撃を回避し続けるというものだったからだ。その様はまさに、台所でカサコソと逃げ回る黒光りするGのごとし。互いのサイズからしても、どちらが昆虫かわかったもんじゃない。

とはいえ、そんな僕にもいくらか強みはある。

それは言わずもがな……と言いたところだけと言ったほうが何かと親切なので言うと、序盤のアバターとは到底思えないほどの屈強の攻撃力だ。

いくらボスキャラといえど序盤のボスなので、僕の剣の一撃が決まれば、一気にＨＰバーを半分……いや、もしかしたら一気にゼロにすることだって可能かもしれない。

だけど、そのためには相手の懐に飛び込んでいかないと駄目なわけ、そんなことを何の考えもなしに行った日には、ゲームオーバーとなってダンジョン外へと強制送還される憂き目を見ることになる。プレイヤーさんもそんなことになるのは面倒臭いと感じているから、こうして逃げ回って寿命を少しでも伸ばそうとしているのだろう。

しかし、このままだといつまで経っても勝負がつかないのも確かだ。まるでポ。モンの通信対戦で互いの攻撃技のＰＰを使い果たして、残る技はＰＰが全快状態で残っている「なきごえ」ないしはそれに類似する補助効果技だけだから、それをゼロにして「わるあがき」を使おうとするまでの道のりのごとく、今の状況はグダグダだ。まずい！ このままでは視聴者が離れてチャンネルをかえてしまっじゃないか！ なんとかしなければ……。

と、そのとき、プレイヤーさんが僕を逃げ回らせながら、アイテムウインドウを表示させた。このゲームはオンラインゲームのため、ウインドウを表示している間にも敵キャラクターは容赦無い攻撃を繰り返してきているわけだが、それを巧みに回避している。

こんなときにいったい何をしているんだ？ プレイヤーさんは。僕が髪の毛の差のところでは振り下ろされる鎌に内心肝を冷やしているというのに、呑気にアイテムの整理でもしているのか？

アイテム欄の一番端っこにあるアイテムを選択し、フィールドに出現させた。

現れたのは、第二層で手に入れた妖精だ。相変わらずの二十四時間海パン一丁の変態妖精が、僕の眼前でふわふわと浮遊し、じつと

こちらに視線を合わせてくる。本来なら、この状態で妖精に話しかけると何らかのガイド機能を果たしてくれるのだろうけど、あるうことかプレイヤーさんは僕に、その妖精を掴ませた。オヤジ顔のそれは、僕の顔をじつと見て黙っている。……気が散るからやめてほしい。

そして、ボスが再び僕に接近してきて、鋭い鎌を振り上げたとき、ボスの顔目掛けてそれを投げつけた。

一直線の軌道を描き、オヤジ妖怪はボスの顔にピタリとひつつくと、ボスがわたたとあわてて、鎌を無差別にブンブンと振り回し始めた。視界が遮られたせいだろう。あるいは……突然の見知らぬおっさんのドアップに混乱しているのかもしれない。

不規則に振り回される鎌が大変危険なのだが、それは前方だけで、後方は完全に無防備状態だった。

プレイヤーさんは目隠しになって混乱しているシザーマンティスの背後に、鎌の攻撃範囲内に入らないように大回りして回り込み、無防備になったボスの背後に、プレイヤーさんは僕を操作して剣を突き刺した。

グイツとボスのHPバーが激減し、あっという間にゼロになる。序盤のボス故に体力がそれほど多く設定されていないのだろう。加えて、僕の破格の攻撃力もあって、一撃必殺を決めることができた。ボスキャラクターの耳を塞ぎなくなるような断末魔がフロア内に響き渡ると同時、シザーマンティスの身体が光の粒子となって天へと昇って行く。

やがて、光の粒子が完全に広間内からなくなると、ファンファーレとともに入ってきたのとは逆の位置にある石の扉が重い音を立てながら開いた。

……どうやら、ボスに勝てたようだが……なんだろうか、この釈然としない気持ちは。なんかこう……「勝った」という気分にまったくなれないんだけど。

っていうかプレイヤーさん！ ボス戦のときまであんな姑息な手

を使って！　せめて大事な局面のときくらいは正々堂々と戦おうよ！
しかし、そんな僕の言葉は完璧に無視し（そもそもプレイヤーさんへ僕の声はまったく届かないわけだけど）、プレイヤーさんはフロアの中央に人形のごとく落ちている妖精を拾って、再びアイテムボックスの中に収納した。

どうやら味を占めてしまったらしい。いつか絶対、今回のような戦法を使うぞ。なまじそこら辺りにいるモンスターは単純なAIで動いていて学習能力がほとんどないから何度でも今回のような戦略が通じるからね。

妖精を回収すると、プレイヤーさんは僕を奥の部屋へと進ませた。そこは正方形の小さな部屋で、中央に宝箱がポツンと置いてあるだけのところだった。これが、このダンジョンを攻略した報酬なのだろう。

プレイヤーさんは何の迷いもないといった感じで僕を宝箱まで接近させると、それを開けさせた。
すると、ちょっとした効果音とともに、

アイテム　地の結晶

効果　大地のマナが結晶化したもの。単体では何の効果もないが……。

そんなメッセージがウィンドウに表示され、手に入れたアイテムが自動でアイテムボックスの中に入った。

『地の結晶』は、売値は序盤ではけっこうなものになるのだが、武器や防具と『合成』したほうが何かと利便性があるので、普通は売らない代物だ。

だけど、『合成』の意味をこのプレイヤーさんは理解していない可能性が高いので、即行で売り飛ばしことだろうね……。プレイヤー

ーさんの目には、この『地の結晶』がゴミアイテムとしか認識されていないことだろう。終番に差し掛かってもお、ボールポケットの中にあるモン。ターボールや、きずぐすりより役に立たない……とプレイヤーさんは思っているはずだ。

宝箱の中身を回収すると突如、僕の足元に幾何学模様の描かれた魔法陣が出現し、白光に光り出した。これは転送系の魔法で、ダンジョンの奥地まで行き、アイテムを取ると自動で発動し、外まで運び出してくれるものだ。

薄暗いダンジョンの光景が徐々に霞み始め、やがて僕の視界が白一色に染まった。

やれやれ……。やっとダンジョンから脱出できるよ……。

第16話 天災なのか幸運なのかよくわからないときつてあるよね

初めてのダンジョン攻略達成からかれこれ一週間が経過した。それは同時に、プレイヤーさんは『アルメダ』の街の滞在期間となる。プレイヤーさんは楽ができてかつ高利益を上げることができる依頼がないか、ログインするたびにギルドに立ち寄り、なかつたら憂さ晴らしをするかのごとく、HPバーがギリギリ残って放置されている瀕死状態のモンスターを見つけてはやつつけることで経験値を稼いでいた。

もはや武士道やら騎士道なんてものがこのプレイヤーさんにはないことは百も承知なわけだけど、それでも、退治されていくモンスターたちに同情の念を抱かざるを得ない。

さらに、他プレイヤーが放置したのであろう、道端に落ちているアイテムを拾ってはそれを自分のアイテム枠に収納したりと、やることが勇者からとてつもなく離れてしまっている。

……い、いかん！ いつもいつもこんな展開ばかりだから僕の中に許容しそうな心が出来上がりつつあったけど、これはどうにか打開策を見つけないといけない！

このままじゃ、勇者というよりただの賊だ。それもかなりひどいレベルの。

たしかに、地道かつ卑劣で卑怯で愚の骨頂という言葉すらもかわいく思えてしまうほどに愚昧な手段でレベル上げをしたこともあって、レベル2から現在レベル7まで上がっているわけだけど、いつまでもこんなことが通用するとは到底思えない。

先のダンジョンの最奥にいたボスモンスターにも、ほとんどまぐれ勝ちしたようなものだし、そろそろ実力というものを身につけるべきじゃないのか？ いや、絶対につけるべきだ！

むやみやたらに逃走の腕と姑息な知恵だけを上げるんじゃない、もつとこう……敵から真正面から挑めるような力を手に入れないと。

それがなかったから、以前決闘を挑まれたときにあっさり負けてしまったんだよ。

どうにかプレイヤーさんに腕を磨いてもらう良い手はないものか。

……………。

……………。

……………ピコーン。

そうだ！ ライバルがいればいいんじゃないか！ もしくは共に戦ってくれる味方が！

主人公が強くなるための秘訣は、競い合う相手がいること。互いにしのぎを削って競争して、そうしてお互いの実力の底上げをしていくのが、もっともセオリーな方法のはず。

プレイヤーさん！ なにさっきからアイテム整理している他プレイヤーのアバターを視界内に収めているの？ まさかまた道具をネコババするつもりじゃないだろうね？

やめてよ。頼むから絶対にやめてよね？ ね？

……………あつ。アイテム整理してるアバターがアイテムドロップして、そのまま道具屋に入っていつてしまった。

それを確認するや否や、こそこそと落ちているアイテムまで忍びより、足の側面を使ってずるずるとその場から離れようとする。まるで、十円見つけたから踏んづけて人目のつかないところまでもっていかうとしているかのようだ。

しかし、そんな妙な行動は当然ながら人目につくもので、往来するアバター——厳密には操作しているプレイヤー——が、僕を一瞥して行く。嗚呼……………、穴があつたら入りたい。

やがて、人氣がさほどない裏道のようなところまでやってくると、ネコババしたアイテムをアイテムボックスの中へと収納した。

手に入れたアイテムはポーション三つ。序盤で手に入れられる回復アイテム故に、回復量はさほど多くはないけど、もともHPが障子並の僕には十分すぎる代物だった。

……ただ問題は、手に入れたアイテムが他人から横取りしたも同然であり、そのことに罪悪感が心に重くのしかかっていること、そもそも敵の攻撃に一発耐えられるのかすら怪しい僕が、回復アイテムなんぞ持つていて意味があるのだろうかという疑問が残るけど。それと、プレイヤーさんがアイテム欄を表示している間、欄の隅っこに、ダンジョンで発見された未確認生物がスッポリと収まっていて、自分を使ってほしそうにじゅつとこちらを見つめていたけど、全力で無視した。

残念だ。そもそもオンラインゲームにガイド役の妖精をつけたのが間違いなんだ。ガイド役なんかつけたら、MMO特有の自由度の高さや、広大なフィールドを探索して誰にも気づかれていないであろう新境地を見つける楽しさがなくなってしまうじゃないか！

……あれ？　ところで、僕は今何か忘れているような気がしてならないんだけど、錯覚かな？　なんか、プレイヤーさんが他プレイヤーのアイテムを横取りしたせいで、横道に逸れているような……。

……ああ！　そうだ！　ライバルだ！　プレイヤーさんにライバルがいたらいいのになあって話だった！

とはいえ、問題はプレイヤーさんに助力してくれるような人がいるものだろうか……。

如何せん、プレイヤーさんのありとあらゆる奇行は、とにかく目立つのである。力にまったくの加減がないため、モンスターを無残にオーバーキルさせたり、街路に等間隔に植えられている木をゆすってドロップされる木の実を取ろうと幹を殴り付けた結果、ポッキンと真つ二つに街路樹をへし折って騒ぎを起こすしで、そのせいで『アルメダ』にいるプレイヤーの間で完全に知られ渡ってしまっている。

……もしかしたら、僕の名前が『ああああ』だということも原因

のひとつかもしれない。さらにいえば、僕の外見が某配管工に似ていることも……。

その後、僕はプレイヤーさんに操作されてフィールドへと飛び出した。どうやら、また例の姑息な手段を使って経験値稼ぎを行おうという魂胆らしい。

なんだろう……。もう怒る気力さえ湧いてこないけど、これは諦めから来ているものなんだろうか。それとも、僕がプレイヤーさんに徐々に感化されていつているからなのだろうか。どちらに転んでも嫌だけど、あえて僕は前者であってほしい。身体はどんなに薄汚れようとも、心はいつまでも清廉潔白な勇者でありたいのさ。

辺りに何も無い、見渡しの良い広大な場所に立つと、僕の視点――正しくはプレイヤーさんのカメラ移動――はぐるぐると、自分を軸に360度旋回する。体力が減って弱っているモンスターがいなか、確認しているのだろう。

僕以外にも、ほかのAvatarがモンスターと戦闘している姿が見て取れているのだけど、他プレイヤーは、モンスターの体力バーが三分の一くらいになると必殺技コマンドを実行させて一気に倒していた。そのためプレイヤーさんは、とても入り込める余地はないと思っっているらしく、そういった人たちは標的から外していた。

プレイヤーさんが探し求めているのは、このゲームをやり始めてまだ幾ばくも経っていない低レベル初心者プレイヤーだ。そういった人たちはまだゲームに慣れていないこともあり、獲物を横取りすることが可能だと、プレイヤーさんは考えているのだろう。

さすが僕のプレイヤーさん。やることがPK染みていて僕の心が穢れていくよ。

僕はプレイヤーさんの操作に忠実に従いながら、プレイヤーさんはカメラを動かして、かつこの獲物がいないか虎視眈々と探している。この労力、もっと他のところで使えば……。

と、そのとき、ふとプレイヤーさんがカメラワークを動かすのをやめた。よって僕の視線もそちらへと注がれることになる。

僕が向いた先にいるのは、モンスターと他プレイヤーのアバターだ。

モンスターはずんぐり体形で、全身が赤茶色の毛で覆われている。さらに腕は丸太ほどに太く、その手には鋭利なナイフのような爪が太陽（もちろん擬似的な）に照らされて光を放っていた。

全体的にがつしりとしたクマ型のそれは『ベア』という、この辺り一帯では間違いなく最強のモンスターだ。そのこともあり、出現頻度も根気よくフィールドを探索しないと表れないうえに、倒した時の経験値も多い。低レベルプレイヤーなら『ベア』一体倒しただけでレベルが1、ないしは2上がるくらいだ。MMOは、レベルが上がりにくい仕様となっているため（特にレベルが20くらいになるとから急激に次のレベルに上がるまでの経験値が飛躍的に上がるため、年にレベルが1〜3上がればいいくらいになる）これは非常にいい経験値稼ぎとなる。

だけど、それだけの高経験値をもっていることもあってか、『ベア』は場違いに思えるくらいに強い。それこそ、前回僕が攻略したダンジョンのボスモンスターよりも強いはずだ。

対峙しているアバターのレベルは15。装備もちゃんと揃えられており、武器であるロングソードで応戦している。

そのかいもあって、『ベア』の体力は風前の灯ほどに削られていて、あと数発攻撃を当てれば倒せてしまえそうだ。

だけど、アバターの体力のほうはそれ以上にひどい状態になっていて、見る限り、彼（アバターは男性）のHPバーはもはやピスピス状態。あと一撃でも受けてしまえば、ゲームオーバーとなること間違いなしだ。

そのこともあってか、彼は戦い方が逃げ腰気味になっている。『ベア』が一步步近づぐごとに距離を保とうと一歩引き、モンスターの攻撃を避けることに意識が回っているようだ。

そんな彼らに、じりじりと僕を接近させるプレイヤーさん。しかも姑息にも、二人の死角となるような角度で攻め入こうとしている。

プレイヤーさん。まさかここまで必死になつて追い詰めた他人の獲物を……………取る気なんでしょうね、この人は。彼のレベルを見る限り、初心者プレイヤーじゃないように思えるけど、今のプレイヤーさんはおそらく、目先の『ベア』しか見えていないんだろぅなあ…………。

プライド？ そんなもの、プレイヤーさんの前にはコイ。ングも同然です。いともたやすく粉碎されてしまいます。なぜ敬語になつてしまっているのかは、僕にもわからない。

そのとき、『ベア』の片手が大きく振り上げられた。対峙している彼にとどめをさすべくの一撃が来ることは確実だ。攻撃が大ぶりなため、冷静にいれば見切つてから即座に反撃もできるはずなのだろうが、生憎なことに、彼はゲームオーバーになりたくないようので、保身に必死でそのことに気づいていない。

だけど、その保身すら怪しく、彼はぎこちなく身体をよじらせるように動いているだけだった。あれじゃ、いい的だ。

そこに、僕が突撃する。

こうすると、まるでピンチの人を助けようとしている勇敢な少年のように思えるかもしれないけど、僕のプレイヤーさんは危機に陥っているアバターなど眼中に映っていない。ただ一点、瀕死状態のモンスターのみに注がれている。

他プレイヤーのアバターに気を取られている『ベア』を、僕はプレイヤーさんの指示通りに背後から剣で斬りつけた。

『ベア』の背に斬りつけると同時、バッシュと派手な白い閃光が散り、グオオオオオオ、とモンスターが断末魔を上げながら光の粒子となつて消滅した。

…………やってしまった。

他のプレイヤーの獲物を横取りし（いつものことだけど）放心状態と化す僕。そんな僕を呆然と眺める、HPピスピスのアバター。

嗚呼！　お願い！　そんなに見ないで！　すべてはプレイヤーさんの出来心なんです！　僕が悪いんじゃないで、プレイヤーさんが悪いんです！

……と、弁解をしたかったけど、残念なことにしゃべれない。

二人の間で何とも言い難い沈黙が訪れる。

……っていうか、プレイヤーさんもやったならやったで早いところ退散しなさいよ！　気まずいでしょうが！　僕が！

アバターがじつとこちらに視線を向けて、ただひたすらに黙っている。この沈黙はきつと、怒りたいことが山ほどあって、まずどれから言おうか迷っている静寂なのだろう。……いや、きつとそうに違いない！

現実ならきつと冷や汗を全身にびっしょりと、まるで滝にうたれたかのようになっているはずの僕は、あまりの気まずさにできるだけ合わせたくない目をアバターに向けている。……あっ、今気づいたけど、名前はコブタロウっていうんだ。

コブタロウさんは、じつとこちらを凝視していたが、やがてその姿がすつとかき消えた。

な……！　まさか、強襲するつもりじゃ！　……いや、普通のやり方じゃ襲うことができないから死角から『決闘手袋』を投げて戦うつもりじゃ……。

………って、あれ？

僕はすると下を見ると、そこに先ほど僕の視界からかき消えたコブタロウさんがいた。

——土下座姿で。

……え？ どういうこと？

展開に追いつかない思考に、さらにとどめをかけるかのごとく、メッセージウィンドウが開いた。

コブタロウ>ぼくを仲間にしてください！

……え？

あれ？ おかしいな。僕は幻覚でも見てしまっているんだろうか？ いやだなあ。いくらプレイヤーさんの横暴から逃れたいという願望が強いからって、幻覚を見るほどまでの末期症状にはなっていないはずだぞ、僕は。

そうだ！ これはきつとバグだ！ そうに違いない！

メッセージウィンドウがバグってしまったていて、本当は「なにさらしとるんじゃ、ボゲェ！」って表示されているはずだ！

あるいはきつと……そうか！ 文字化けだ！ うん、そうに違いない！

だからきつとしばらくしたら解消されて、コブタロウさんの本当のメッセージを知ることが出来るはずだ！

……。

……。

……あれ？ おかしい、文字がいつこうに変化しようとしている。

ということは、これは決してバグでもなければ文字化けしているわけでもないのか？

.....。

.....。

.....な？

.....なっ？

なんだとおおおおおお
———！？

第17話 仲間（らしきもの）ができたのは良いのやら悪いのやら……

……どうやら、たいへんなことになってしまったようだ。

どのようにたいへんなのかって？ 決まっているじゃないか。起きるはずもない出来事が起きてしまったからだよ。

背後から絶えず気配を感じる。そこには、ここ数日、延々と僕につきまとっている物好きことコブタロウさんがいた。

コブタロウさんは、長い黒髪を後ろでひとつに纏め、柔和な人当たりが良さそうな好青年を思わせる風貌のアバターを使っていた。身体は序盤で手に入る無難な皮の鎧を装備しており、腰にはひと振りのロングソードが鞘に収めて、さげられていた。レベルも15とこのゲームをやり始めてそれなりの時間が経っていることがわかる。そんな彼は、いったい何を思ったのか、僕の仲間になりたいのだという。

ありえない。好感度を上げるようなイベントはこれといってなかったはずだ。……いやむしろ、他者の好感度を垂直に右肩下がりさせるような暴挙は数多にし続けていたけど。（耳にタコかもしれないけど、僕の意味とは無関係に行われている行為だということをわかっていてもらいたい）

僕はどうにかして彼の説得を試みたいと思った。

しかし、残念なことに僕は所詮、一アバター故にプレイヤーさんの行動に抗うことができない身。泣く泣く彼のアバターにアイコンタクトでコブタロウさんに考えを改めるように説得してくれとメッセージを送るが、彼の瞳にはもうすでに諦めの境地に至った色に染まっていた。

おそらく、プレイヤーとは長い付き合いだから、自分を操っている人がいったいどんな人なのか知っているのだろう。

これはきつと………そうか！ 新手のスタンド攻撃か！

……いや、冗談です。ちょっと試みてみたただけです。――

って、言っている場合じゃないけど。

まあきつと、一時の気の迷いのはずだ。

プレイヤーさんの暴挙を目の当たりにすることでコブタロウさんは目を覚まし、若かりし日の到りを存分に後悔して、電柱に頭を何度も何度もたたきつけることになることだろう。コブタロウさんのプレイヤーには悪いけど、これも更生するための術とっていい。

とかなんとか僕が思考をフルで回転させているうちに、プレイヤーさんは『アルメダ』の広場までやってきた。

ちなみに、後ろから常時トコトコとカルガモの子供みたいについてくるコブタロウさんを、プレイヤーさんは完全に無視している。なにせ、話しかけられてもうんともすんとも言わず、黙々と己が為すべき行動をし続けているのだから。

しかし、コブタロウさんはそんなプレイヤーさんにまったく不快に思っていないらしく、それを表に出そうとも時々発信するメッセージにも滲ませるようなことはなかった。根がいい人っぽいだけに、実においしい。このプレイヤーさんなんかには構わずに、もっと他の人と組んだほうがずっと面白いはずだろうに……。今なら、道を踏み外した子供を嘆く母親の気持ちがなくわかるような気がする。プレイヤーさんは先ほどからじっと、アイテム整理をしている他プレイヤーのアバターをカメラワーク内に収めていた。

そのカメラの範囲に収められたアバターは、ただただ呆然と魂が抜け落ちたように突っ立っているように傍目からは見えるが……。あれは立ち止まってアイテム欄の整理をしているプレイヤーに多く見られるものだ。アバターを操作しながらボックスの整頓をするプレイヤーも、中にはいるんだろうけど、大抵の人はそんな食パンを齧りながら学校へ登校するかのごとく一度に二つの行動をしたりせず、辺りにモンスターがいない、安全な街中でボックス内の整理を行う。

……。だけど残念だ。この街中にもモンスターはいるんだ。

アイテム整理の際に捨てられる、あるいは一時的に道端に放置する道具を虎視眈々と狙おうとしている輩が。

それが僕……正しくは僕のプレイヤーさんだということは、あえて明言しなくてもわかるだろう。明言してしまったけど、細かいツツコミはなしの方向でよろしくお願いつかまつる。……って、なんか口調も変になったけど、気にしないように。気にしないようにと言ってしまったっている時点でどことなく気にしてしまっているような気がするけど、それこそ気のせいだよ。……って、これ以上続けるとエンドレスになりそうだからここで閑話休題してもいいかな？
かなかな？

閑話休題。

えーっと……。何の話だったっけ？ ……そうそう。プレイヤーさんが他人のアイテムをネコババしようとしてるんだった。

いい加減誰か、このプレイヤーさんに天罰を下してくれないものかな。でも哀しいことに周囲のプレイヤーは各々のプレイに忙しいようで、これから行われるであろうプレイヤーさんの横暴を止めようとする者はいない。

ただ唯一、こちらに常時視線を寄せている人がひとりばかりいるけど……それは咎めるというより「これからきつとナイスなことをするに違いない」という好気のものだった。

あああああああ………。お願いだ。そんな眼差しで僕を見ないでくれ。

僕には君の期待しているような行いを到底できそうにない。

そんな衆人環視——とはいってもひとりだけ——が見ている中で、プレイヤーさんはやりやがった。アイテム整理をしていた人がその場を離れ、姿が見えなくなったのを確認すると、地面に散らばっていた道具をすべて自分のアイテムボックスの中に収納したのだ。

アイテムをひとつひとつ、ボックス内に入れることに、僕の中の勇者度数がメリメリと直下するかの勢いでダウンしていく。

勇者？ なにそれ？ おいしいの？ そんな言葉がプレイヤーさんの口から聞こえてきそうだ。だけどこれで、コブタロウさんは僕に憧れをもつのを止めてくれるかもしれない。

そうですね。貴方が憧憬の的として見ていた人は、こんなにも卑劣で汚い真似をする悪党だったんですよ。勇者とは程遠い、勇者の皮を被っているだけの魔王様ですよ。

やがて、アイテムをすべて拾い終えるプレイヤーさん。なんとなく、画面越しからプレイヤーさんの満ち足りた表情が想起される。そのとき、先ほどまで遠目で見ていたコブタロウさんが、スタスタとこちらに向かって歩いてきた。どことなくその顔は、なにか物言いたそうなものだ。（単に僕が色眼鏡で見てしまっているだけだ
が）

これはもしかしてあれか。「貴女がそんな人だとは思いませんでした！ もう絶交です！」と言ってコブタロウさんが別れるフラグか？

おお、やっとわかってもらえたんだね。そうなんだよ。君のこれからも続くであろうMMO人生を、こんなろくでなしのために時間を費やす必要はないんだ。

さあ！ 特と僕を罵ってくれ！ そして別れようじゃないか！

…………… ああ、ちよつとその君。そうそう、その画面越しにいる君だよ。

今さっき、「このドMが」とか思ったんじゃないの？

言っておくけど違うからね。他人の光ある未来を蔑ろにさせないために、心を鬼とさせてあえてやっているだけだからね。

僕の前に立ちはだかり、停止するコブタロウさん。プレイヤーさんはそんな彼を、まるで立ち木を避けるようにそばを通り過ぎようと僕を動かすが、コブタロウさんがそれを許さない。通せんぼする。じつとこちらをまつすぐに見つめてくる瞳に、僕はできれば首を逸らしたかったが、そうするわけにもいかない。…………… いうかできない。

僕の胃がキュツと締め付けられ（アバターだけど）、一刻も早くこの場から離れたいという切なる願いをくすぶらせていると、

コブタロウ>素晴らしいです！

……………はい？

気のせいかな？ 今さっき、プレイヤーさんの行動を称賛する声が聞こえてきたような気がしたけど…………。

そんな僕の気持ちとは裏腹に、開かれたメッセージウインドウに、さらに言葉が綴られる。

コブタロウ>落ちているゴミを自発的に回収することで、街を常に綺麗にしようと思ってしたんですね！ 最近の人たちのゴミのポイ捨てを許さないその心意気……………。お見事です！

いや、違うよ。君が思っている以上にこのプレイヤーさんは綺麗じゃないよ。

いったい何をどうしたらそんな発想が出てくるか僕にはわからないけど、はつきり言える。——君のその考えは誤解だと。

本当はこのプレイヤーさんは自分のことしか頭に入っていないくて他人の迷惑なんてどこ吹く風の人情の欠片もない方ですよ。

だけど、プレイヤーさんはそんなコブタロウさんの純に満ちたメッセージを無視し、返事することなく彼の傍らを通り過ぎて先へと行った。

コブタロウ>なるほど。できる男は多くを語らずに行動で示すものなんです。勉強になります。

いやいや。少なくとも僕のプレイヤーさんを真似しちゃ駄目だ。マナー違反やまりまりで、ろくな人間じゃなくなってしまうよ。君はせめて僕のような魔王道に走らないでくれ。

その後もプレイヤーさんの横行は続く。

アイテム拾いから始まり、他者の獲物を横取りしたり、木の実を取ろうとして木を揺するうとすれば、力の加減を間違えてなぎ倒したり……。一番最後のは百歩……。いや一万歩譲って大目に見るとしても、前者二つはいい加減やめてください、と言いたかった。

気分の沈んでいく僕とは反比例して経験値はグングンと上がり、レベルが現在10となっているわけだけど、嬉しくないの言うまでもない。

おまけにレベルUP時に行えるパラメータの値の振り分けが相も変わらず攻撃力ばかり上げるものだから、障子のごとく薄い防御力は今も変わっていない。さすがにスライムの攻撃くらいは一発だけのげるくらいにはなったが、それまでだ。二発目は防げないし、スライム以上のランクのモンスターには一撃を受けただけでもゲームオーバーとなる。要するに、役に立たない防御力というわけだ。

数々の暴挙を成すことでレベルを上げているプレイヤーさん。どう考えても褒められたものじゃないのは誰が見ても百も承知のはずなのだが、ただひとり……。コブタロウさんだけはこういうわけかプレイヤーさんの行動をすべて友好的にとらえていた。

根が善良ってレベルじゃねーぞ！ どうしてこんないい人が僕を慕うんだ！？ この子は道を間違えたとは思えない。

ちなみに言わせてもらうと、コブタロウさんが操っているアバターは常時、僕を非難するような眼差しで見つめていたので、余計にやるせない気分になるというものだった。

どうやらアバターのほうは常識人のようだ。それだけに辛い。口では好意的なことを言われても、表情がまるつきり非難と軽蔑の混じったものなんだから、嫌味としか思えない。

……まさか、これからもずっとこれが続くのだろうか。

そう思うと、僕はこの先の未来に暗澹としかものを感じずにはいられなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5700g/>

勇者『ああああ』

2010年10月9日19時29分発行